

**米国における向社会的行動の分類学的研究 : (4)  
促進要因と抑制要因の構造解明とそれに基づく行動  
類型の特徴づけ**

その他のタイトル	A Taxonomic Study of Prosocial Behavior in the United States of America : (4) The Structures of Motives for Helping and Not-helping
著者	高木 修
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	26
号	2
ページ	73-127
発行年	1994-12-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00022539">http://hdl.handle.net/10112/00022539</a>

## 米国における向社会的行動の分類学的研究

### (4) 促進要因と抑制要因の構造解明とそれに基づく行動類型の特徴づけ

高 木 修

A Taxonomic Study of Prosocial Behavior in the United States of America

(4) The Structures of Motives for Helping and Not-helping

Osamu TAKAGI

#### Abstract

Taxonomic research is essential for the planning of research design, the understanding of results and the formulation of theory. In accord with this notion, a series of taxonomic research projects has been carried out to detect clusters of helping behavior, fundamental behavioral dimensions, normative attitudes toward helping, and motives for helping and not-helping. As prosocial behavior acquired through social learning is thought to be prescribed by culture, the taxonomic study was done in the United States of America using a cross-cultural approach.

In order to extend former research(Takagi, 1991, 1992, 1993), this study has focused upon the clarification of motivational structures for helping and not-helping, motivational characteristics of 8 helping clusters and cultural differences between Japan and the United States of America.

The results indicate that there are many similarities, rather than cultural differences, in motivational structures and motivational features of helping clusters.

Key Words: prosocial behavior, helping behavior, motive for helping and not-helping, cluster of helping behavior, taxonomic research, cross-cultural approach

#### 抄 録

研究の計画, 研究結果の解釈, および理論の構築などにとって, 分類学的研究は必須である。その視点から一連の研究を行い, 向社会的行動の類型, 行動の基本的な特性次元, 行動を指示する規範的態度, および行動生起に関係する援助動機と非援助動機を明らかにした。ところで, 社会的学習によって習得される向社会的行動は, 文化に規定される。そこで, 同様の分類学的研究を米国においても実施し, 向社会的行動に関する日米間の文化差を明らかにする。

この研究では, 高木(1991, 1992, 1993)に基づき, 米国において向社会的行動の生起を規定する, つまり生起を促進する, あるいは抑制する要因(動機, 原因, 理由)の構造を解明し, また, 得られた促進的, および抑制的基本要因の観点から, 向社会的行動の8類型(クラスター)を特徴づける。さらに, 要因構造とそれに基づく類型特徴に関する日米間の文化差を明らかにする。

その結果, 日米の文化に共通するものと, 各文化に特有なものが, 構造と類型特徴の両方において認められた。

キーワード: 向社会的行動, 援助行動, 援助および非援助動機, 援助行動群, 分類学的研究, 比較文化的接近法

目 次

1. 向社会的行動の規定要因
    - 1) 規定要因とその研究の目標
    - 2) 日本における向社会的行動の規定要因の研究
  2. 向社会的行動の規定要因の比較文化的研究
    - 1) 向社会的行動の比較文化的研究
    - 2) 米国における向社会的行動の分類学的研究
  3. 規定要因の構造解明とそれに基づく行動類型の特徴づけ
    - 1) 向社会的行動の促進要因と抑制要因の構造解明
    - 2) 規定要因による向社会的行動の類型の特徴づけ
  4. 最後に：向社会的行動の分類学的研究の意義と今後の研究
- 参考文献

1. 向社会的行動の規定要因

1) 規定要因とその研究の目標

向社会的行動 (prosocial behavior) の生起を促進する、あるいは抑制する要因は、既に多くの研究が、種々の接近法を用いて明らかにしている。それらの要因は、①援助者の人口統計学上の特徴、性格特性、規範意識、社会的責任感といった援助の担い手の人的、心理的特性に関するもの、また、②援助行動に伴うと予想される出費と報酬などの行動それ自身の特徴、援助者が一時的に体験しているところの情動状態、傍観者や援助モデルの存在、あるいは気温や騒音といった環境の特徴などの援助状況の特徴に関するもの、さらに、③被援助者の人口統計学上の特性、あるいは外見の特徴や援助要請の仕方といった援助の受け手の人的、心理的特性に関するもの、の3つに大別される。

一方、促進要因と抑制要因（特に、援助者の内的特性に焦点を当てる場合は、「動機」と呼ばれる）の研究は、①実際の研究に先立って、理念的、演繹的に、あるいは実証的、帰納的に行動生起に関連すると思われる要因を分類、整理しようとするもの、また、②向社会的行動、例えば、思いやり行動の理由をいくつかのカテゴリーに分けて、子供の発達に伴ってその理由がどのように変化していくかを明らかにしようとするもの、さらに、③向社会的行動の実行、あるいはその非実行に至るまでの意思決定過程のモデルを提案するとともに、従前の研究が明らかにした影響要因をその中に位置づけて整理しようとするもの、そして、研究量としては圧倒的に多数を占めるところの、④研究者が恣意的に選択した2、3の要因を組み合わせ、行動生起に及ぼすそれらの要因の効果を実験法などを用いて実証しようとするもの、の4つに大別される。

この論文で報告する研究は、大別された3つの要因の全てを対象にして、研究方法の①によって、特に、実証的、帰納的に、行動の生起を促進する、あるいは抑制すると思われる要因の構造を解明し、それに基づいて向社会的行動を特徴づけようとするものである。

2) 日本における向社会的行動の規定要因の研究

(1) 原田純治（1990）による促進要因（援助動機）の研究

原田は、援助行動の内的規定要因として援助動機と性格とを取り上げ、行動とそれらの要因との関連性を研究した。なお、原田純治（1989）は、大学生が日頃の相互関係の中で「してもらって感謝した経験を持つ」ところの典型的な38種類の被援助行動をクラスター分析し、以下の代表的な行動を含む7つの援助行動型を析出している。

- ① 「金品の譲渡・貸与」型：お金を貸す，食べ物を奢る，プレゼントをあげる
- ② 「紹介・勧誘」型：友だちを紹介する，アルバイトを紹介する，遊びなどに誘う
- ③ 「代行」型：友だちの代わりに買物に行く，部屋の掃除をしてあげる
- ④ 「同調」型：買物について行く，友だちにつき合っ出て出かける，一緒に帰る
- ⑤ 「小な親切行動」型：落し物や忘れものを届ける，棚の荷物を取ってあげる，荷物を持ってあげる
- ⑥ 「助言・忠告」型：進路についての相談にのる，恥ずかしいミスを指摘する，落度がないように注意する
- ⑦ 「気遣い・いたわり」型：相手の様子を気遣う，体の調子を心配してあげる，病気のとき見舞う

原田（1990）は、まず予備調査として、典型的な38種類の援助行動の各々に関して、その生起を規定すると思われる動機を自由記述で大学生から収集した。そして、得られた多数の動機を内容分析して、18種類の代表的な動機（以下の動機因子に高く負荷する動機項目を参照）にまとめ

表1 援助動機の構造（バリマックス回転後の因子負荷量）（原田，1990）

援助動機	I 因子	II 因子	III 因子	IV 因子	V 因子	VI 因子	h <sup>2</sup>
その人が困っているから	.729	.139	.246	-.016	.045	-.016	.614
その人が助かるから	.717	.097	.139	-.008	.150	-.118	.579
困った時はお互い様だから	.673	.140	.245	-.112	.143	.044	.567
自分も困ったことがあるから	.605	.329	.290	-.050	-.037	.007	.562
人を助けることは気持ちがいいから	.571	.085	.128	-.059	.358	-.138	.500
頼まれたから	.470	.040	-.297	-.010	.080	-.075	.323
その人の役に立ちたいから	.464	.096	.248	-.001	.437	.001	.477
自分も～してもらってうれしかったから	.143	.696	.100	-.082	.252	.027	.586
自分も～して欲しい時があるから	.225	.680	.081	-.098	-.005	-.138	.548
仲の良い友達だから	.046	.461	.042	-.248	.187	.109	.325
その人のことが心配だから	.248	.096	.723	-.012	.046	-.040	.597
放っておけないから	.353	.048	.640	-.005	.032	-.089	.545
その人がかわいそうだから	.300	.100	.498	-.103	.090	-.298	.456
～することは大したことではないから	.070	.103	-.118	-.634	.040	-.038	.434
あたりまえのことだから	.021	.232	.296	-.558	.100	-.069	.468
その人が喜んでくれるから	.200	.366	.005	-.080	.561	-.074	.501
いつもお世話になっているから	.251	.342	.014	-.204	.428	.116	.418
～してあげないとその人に悪いから	.167	.127	.145	-.175	.045	-.440	.291
寄 与 率	34.60	18.76	19.03	10.01	13.27	4.34	

た。本調査では、7つの援助行動型を代表する20種類の援助行動（以上の行動型を代表する行動を参照）の各々を行う理由として、18種類の動機がどの程度当てはまるかを「あてはまる」から「あてはまらない」までの3段階で大学生に評定させた。そして、援助動機の因子構造を明らかにするために、この評定値を基に、動機項目間の相関を算出し、その行列に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を適用した。その結果、以下のような動機項目が高く負荷する6種類の援助動機因子を析出した（表1）。

- ① 「援助の規範意識と合理的援助効用の予期」：その人が困っているから、その人が助かるから、困ったときにはお互い様だから、自分も困ったことがあるから、人を助けることは気持ちがいいから、頼まれたから、その人の役に立ちたいから
- ② 「互惠と友好的関係」：自分も～してもらってうれしかったから、自分も～して欲しい時があるから、仲の良い友達だから
- ③ 「被援助者への同情」：その人のことが心配だから、放っておけないから、その人がかわいそうだから
- ④ 「援助コストの低さと当然さ」：～することは大したことではないから、当り前のことから
- ⑤ 「合理的でない援助効用の予期」：その人が喜んでくれるから、いつもお世話になっているから
- ⑥ 「非援助の後ろめたさ」：～してあげないとその人に悪いから

原田（1990）は、さらに、援助行動の生起と有意に関連する援助動機因子を明らかにするために、援助行動型を目的変数に、6つの援助動機因子を説明変数とする重回帰分析を行っている。その結果（表2）に基づいて、援助行動型の特徴（性差がいくらかあるが、紙数の関係で、男女

表2 援助行動と援助動機との関連（重回帰分析結果）（原田，1990）

援助動機	援助行動						
	金品の譲渡・貸与型	紹介・勧誘型	代行型	同調型	小さな親切型	助言・忠告型	気遣い・いたわり型
第I因子 援助規範意識と合理的援助効用の予期	.063	-.295 a	.046	-.118	.178	.193	.363 b
第II因子 互惠と友好的関係	.262 d	.203 c	.267 c	.240 b	-.056	.182 d	.078
第III因子 被援助者への同情	.052	.121	-.039	-.009	-.179	.136	.118
第IV因子 援助コストの低さと当然さ	.126	.212 b	.187 d	.237 b	-.115	.249 b	-.037
第V因子 合理的でない援助効用の予期	-.077	.104	-.199 e	-.113	.300 a	-.161	-.313 b
第VI因子 非援助の後ろめたさ	.002	.065	-.033	-.011	.015	-.181 c	.011
決定係数 (R <sup>2</sup> )	.080 a	.236 a	.106 a	.137 a	.099 a	.192 a	.145 a

注1：数値は、標準偏回帰係数を表わす。

注2：a： $p < .001$  b： $p < .01$  c： $p < .02$  d： $p < .05$  e： $p < .10$

込みの全体の特徴）を以下のように概観している。

① 「金品の譲渡・貸与」型援助

「互恵と友好的関係」(F 2) が正に関連しており、この型の行動が、友好的関係を背景として人々が相互に行い合うという性質を持つことが明らかとなった。

② 「紹介・勧誘」型援助

「互恵と友好的関係」(F 2)「援助コストの低さと当然さ」(F 4) が正に関連し、「援助の規範意識と合理的援助効用の予期」(F 1) が負に関連している。この型の行動は、コストもかからず、友人間で気軽にし合える援助であり、それを通じて友人関係が強化されること、なお、この型の行動が、被援助者が一人では乗り越えられないような困難な事態に直面している状況で行われる援助とは異なることが示唆された。

③ 「代行」型援助

「互恵と友好的関係」(F 2)「援助コストの低さと当然さ」(F 4) が正に関連し、「合理的でない援助効用の予期」(F 5) が負に関連している。この型の行動には、対人関係の深さと互恵、またコストの低さが影響を及ぼすこと、一方、負の有意な関連性から、この型の行動が、自ら進んで行うような援助でないことが示唆された（なお、これについては、多重共線性の危険が指摘されている）。

④ 「同調」型援助

「互恵と友好的関係」(F 2)「援助コストの低さと当然さ」(F 4) が正に関連している。この型の行動にも、対人関係の深さと互恵、またコストの低さが影響を及ぼしていることが示唆された。

⑤ 「小さな親切行動」型援助

「合理的でない援助効用の予期」(F 5) が正に関連している。これは、この型の行動では、相手の困っている様子が認知されやすいために、援助をした場合の相手が喜ぶ姿が予想しやすいからであろう。

⑥ 「助言・忠告」型援助

「互恵と友好的関係」(F 2)「援助コストの低さと当然さ」(F 4) が正に関連し、「非援助の後ろめたさ」(F 6) が負に関連している。この型の行動にも、対人関係の深さと互恵、またコストの低さが影響を及ぼしている。一方、非援助の後ろめたさが理由にならないとされたのは、この型の行動の場合、援助者は被援助者が困難を乗り越えるための力添えをするだけで、実際に乗り越えようと努力するのは被援助者自身であると捉えたためと考察された。

⑦ 「気遣い・いたわり」型援助

「援助の規範意識と合理的援助効用の予期」(F 1) が正に関連し、「合理的でない援助効用の予期」(F 5) が負に関連している。正の関連性は、この型の行動では、その必要性が明

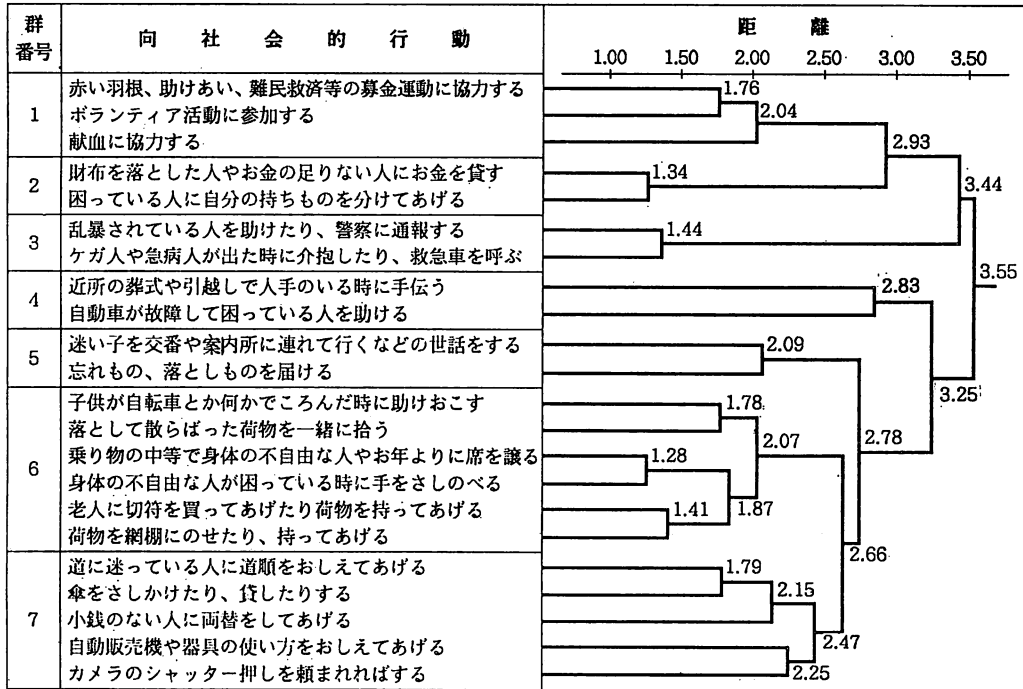


図1 向社会的行動の群構造（樹状図）（高木，1982）

瞭で、それが役に立つということの判断がしやすいことを暗示している。一方、合理的でない援助効用の予期が援助の理由にならないのは、これを認めると、偽善的な自己と直面することになり、自らの純粋な援助を疑うことに帰結するためであろう。

以上が、各援助行動型と援助動機因子との関連性であるが、「互惠と友好的関係」(F 2)と「援助コストの低さと当然さ」(F 4)とが多くの援助行動型においてその生起理由になり易いとされていることと、逆に、「被援助者への同情」(F 3)が7つの援援行動型のいずれにおいてもその生起理由になりにくいと受け取られていることに注目される。

(2) 高木修 (1983) による促進要因 (援助動機) の研究

高木は、研究の第1段階として、高木修 (1982) の究明した7種類の向社会的行動群 (図1) のそれぞれを代表するものとして合計12種類の行動を選定し (表3)、つぎに、それらの行動の生起を促進すると思われる要因を次の手続きによって収集した。例えば、「赤ちゃんを抱いた人 (Y) が電車に乗ってきたので、Xは自分の席をその人に譲りました。なぜXはYに自分の席を譲ったのでしょうか。その行動の動機、原因、理由になったと考えられるものを思いつくだけ多く、自由に記して下さい。」と被調査者 (36名の男女大学生) に求めた。このような質問を他の11行動に関しても行った。その結果、12の全行動に関して、209種類、延べ907個の動機、原因、

表3 動機研究で用いられた12種類の向社会的行動  
（基本特性と応答された援助および非援助動機の件数）（高木，1983）

向社会的行動群		基本特性			研究で用いた向社会的行動		応答された 動機の件数
No.	群名	第1	第2	第3	No.	行動状況	
1	寄付・奉仕行動	0	-	+	7	献血要請に応じる（応じない）	69（66）
					12	募金要請に応じる（応じない）	78（100）
2	分与行動	-	-	+	8	困っている人にお金を貸す （貸さない）	73（64）
3	緊急事態における救助行動	+	+	+	6	怪我人のために救急車を呼ぶ （呼ばない）	46（72）
					10	火事現場で消防活動に協力する （協力しない）	67（60）
4	努力を必要とする援助行動	0	-	+	5	引越しの手伝いをする（しない）	113（95）
5	迷い子・遺失者に対する援助行動	+	+	-	2	落とし物を警察に届ける（届けない）	89（80）
6	社会的弱者に対する援助行動	-	+	-	3	老人の重い荷物を持つ（持たない）	79（99）
					9	赤ちゃんを抱いた人に席を譲る （譲らない）	55（79）
					11	荷物を拾うのを手助けする （しない）	53（72）
7	小さな親切行動	-	-	-	1	小銭のない人に両替をする （しない）	88（87）
					4	道順を教える（教えない）	97（87）

理由が得られた。第2段階として、内容に基づきそれらを繰り返し整理し、最終的に25種類の代表的な促進要因（動機，原因，理由）にまとめた（表4の要因の欄を参照）。第3段階として、この25種類の促進要因が、12種類の向社会的行動のそれぞれにおいて、どの程度その生起を促進する動機，原因，理由になると思うかを、「非常になる」（5点）から「全くならない」（1点）までの5段階で評定するように、別の105名の男女大学生に求めた。このようにして得られた評定値のデータに主成分分析を適用し、その解をバリマックス回転して、以下の6種類の促進的基本要因（援助動機）を明らかにした（表4）。なお、この研究でいう促進要因とは、向社会的行動を生起させる動機，原因，理由のことである。

- ① 「行動促進的状況判断」：この状況は、援助が必要だと思う。我々は、お互いに助け合うべきだから、私にその援助責任があると思う。幸運にも、それを行う能力や資格が自分にはある。
- ② 「責任の分散不可能性」：気の毒な人がいるのに、誰一人としてその人を助けようとしなない。あるいは、援助できる人が自分以外には誰もその場にいない。誰かいても、自分が援助を必要としている人の最も近くにいる。
- ③ 「援助または被援助の好ましい経験」：今までに援助されて助かったことがあり、今度は自分が何かよいことをしたいと思っている。あるいは、今までに援助してよい気分になったことがあり、また援助をしてその気分を味わいたいと願っている。



表4 援助動機の構造(回転後因子負荷行列)(高木, 1983)

援助動機型の番号	援助動機の番号	援助動機	援助動機型							
			I	II	III	IV	V	VI	H	
1	5	援助の能力や資格が自分にあると思ったから 互いに助け合わねばならないと思ったから 援助の義務が自分にあると思ったから 援助が必要だと思ったので	.733	.185	.136	.140	.029	.003	.611	
	4		.728	.306	.158	.018	-.168	.013	.677	
	23		.703	.217	.220	-.118	.111	-.033	.617	
	12		.625	.408	.096	.078	-.072	.080	.584	
2	18	誰一人として援助しようとしなかったから Yの近くにいたので 自分以外に誰もそこにいなかったから Yが気の毒に思えたので	.173	.746	.114	.057	.058	.065	.610	
	20		.085	.690	.045	.112	.041	.085	.506	
	3		.187	.654	.022	.001	.041	.272	.539	
	19		.310	.629	.217	.111	-.074	.030	.558	
3	24	今まで援助されたことがあったので 援助に成功して良い気持ちになったことがあったので 何か良いことをしてみたいから 今までに援助したことがあったから	.186	.058	.776	-.041	.024	.225	.693	
	22		.102	.166	.766	.237	.187	.025	.717	
	25		.085	.085	.606	.465	.030	-.056	.601	
	6		.403	.093	.540	.239	.042	.056	.524	
4	2	そのとき気分が良かったので Xが思いやりのある愛他的な人だから Yが好ましい特徴を持っていたから 援助出費が小さかったから	-.046	.076	.137	.746	.083	.029	.591	
	15		.222	.097	.110	.683	-.008	.157	.562	
	13		-.120	.074	.011	.637	.102	.431	.622	
	7		.087	-.054	.171	.505	.363	.058	.430	
5	17	援助しないためによりむる出費が大きかったから 報酬や返礼が期待できたから 他者の目が気になったから 援助要請の原因が自分であり、援助の責任を感じたから	.055	.056	-.044	.059	.827	.132	.712	
	21		-.110	-.015	.294	.028	.701	.105	.603	
	16		-.102	.259	.133	.241	.611	.039	.528	
	14		.424	-.042	-.246	.074	.502	.276	.576	
6	8	Yが自分の知っている人だったから Yが自分の好きな人だったから 直接援助を要請されたので	.011	.040	.161	.113	.114	.817	.712	
	11		-.074	.037	.110	.278	.154	.779	.727	
	1		.120	.325	-.025	.005	.062	.507	.381	
	9	他の人が援助していたので 無意識に	.193	.273	.308	.026	.190	.260	.311	
	10		.230	.382	.020	-.041	.176	-.096	.241	
固有値 (EIGEN VALUE)			5.782	2.920	1.804	1.491	1.144	1.102	14.241	
寄与率 (PCT OF VAR)			23.1	11.1	7.2	6.0	4.6	4.4	57.0	

表5 非援助動機の構造（回転後因子負荷行列）（高木，1987b）

非援助 動機型 の番号	非援助 動機の 番号	非 援 助 動 機	非 援 助 動 機 型					
			I	II	III	IV	V	H
1	6	自業自得であり，自分には関係ないと思っ たので	.722	.155	.032	.003	.200	.587
	13	報酬や返礼が期待できなかったので	.701	.155	.155	-.057	.024	.544
	12	自分の難儀は自分で切り抜けるべきだ と思っただけ	.695	.157	.110	-.024	.206	.562
	7	他者がどのように思うか気にならな かった	.631	.204	.039	.142	.068	.466
	8	援助しないためにこうむる出費が小 さかった	.601	.174	.074	.168	.061	.429
	25	援助する義務が自分にはないと思っ た	.579	.152	.198	.123	.392	.567
	9	Yが自分の知らない人だから	.570	.159	.151	.418	.012	.548
	15	関わりたくなかった	.513	.188	.255	.248	.073	.430
	18	面倒だったので	.458	.361	.315	.323	-.144	.564
	10	援助が必要だと思わなかった	.407	.244	.224	.073	.333	.392
2	2	目立つのが恥ずかしかった	.151	.787	-.015	.139	-.059	.665
	3	今までに援助を求めて拒否されたこ とがあっただけ	.160	.599	.165	.026	.246	.473
	5	誰一人として援助しようとしな かった	.341	.596	-.056	.137	.040	.496
	26	おせっかいと思われなくな かった	.310	.543	.165	.152	.161	.468
	17	今までに援助に失敗して嫌な気持 になった	.116	.535	.251	.017	.437	.554
	19	今までに援助したことがな かった	.222	.527	.123	.180	-.019	.375
	1	その時の気分が悪かった	.104	.525	.210	.107	.096	.351
3	22	Yが嫌いな人だから	.134	.207	.780	.178	.228	.753
	20	Yが好ましくない特徴を持 っている	.144	.248	.737	.179	.224	.708
	14	Xが思いやりのない，利己 的な人	.184	.034	.697	.042	-.014	.523
4	23	他の人が援助していた	-.078	.037	.165	.751	.182	.632
	11	自分以外にも何人かそこ にいた	.343	.236	.017	.691	.042	.653
	4	Yから遠く離れていた	.073	.414	.089	.558	.148	.518
	21	直接援助を要請されな かった	.364	.216	.333	.473	.046	.517
5	16	援助する能力や資格が自分 にはない	.154	.136	.005	.065	.763	.629
	24	援助に必要な出費が大き かった	.198	.009	.227	.237	.604	.512
固有値 (EIGEN VALUE)			8.330	1.725	1.513	1.276	1.070	13.914
寄与率 (PCT OF VAR)			32.0	6.6	5.8	4.9	4.1	53.5

- ④ 「援助者もしくは被援助者の好ましい人格特徴 および 援助者の良き感情状態」：被援助者が、例えば、好感を持たせる 外観をしているといった好ましい特徴を持っている。あるいは、援助者が、例えば、思いやりのある愛他的な人物であったり、自分自身のことから解放されて他者の問題に関心を向けることが出来るほどよい気分や感情の状態にある。
- ⑤ 「非援助出費や援助報酬の予想」：援助責任が自分にあたり、他者からの援助期待がある。それにもかかわらず、もし援助しないと、非難や不承認といった出費が自分にもたらされることが予想される。あるいは、逆に、もし援助すれば、賞賛や承認といった他者からの社会的報酬や被援助者自身からの返礼が期待できる。
- ⑥ 「援助者と被援助者の近い関係」：援助すれば、援助者と被援助者の間に親密な人間関係が成立すると期待できる。あるいは、両者の間に既に友人や知人といった親密な関係があり、それが維持・発展できると思われる。

### (3) 高木修 (1987b) による抑制要因 (非援助動機) の研究

高木は、向社会的行動の促進要因の研究と同様の手続きで、向社会的行動の抑制要因とその構造も明らかにしている。研究の第1段階として、高木修 (1982) の究明した7種類の向社会的行動群のそれぞれを代表するものとして合計12種類の行動を選定し (表3)、つぎに、それらの行動の生起を抑制すると思われる要因を次の手続きによって収集した。例えば、「赤ちゃんを抱いた人 (Y) が電車に乗ってきたのに、Xは自分の席を譲りませんでした。なぜXはYに自分の席を譲らなかったのでしょうか。その非行動の動機、原因、理由になったと考えられるものを思いっただけ多く、自由に記して下さい。」と補調査者 (36名の男女大学生) に求めた。このような質問を他の11行動に関しても行った。その結果、12の全行動に関して、193種類、延べ961個の動機、原因、理由が得られた。第2段階として、内容に基づきそれらを繰り返し整理し、最終的に26種類の代表的な抑制要因 (動機、原因、理由) にまとめた (表5の要因の欄を参照)。第3段階として、この26種類の要因が、12種類の向社会的行動のそれぞれにおいて、どの程度その生起を抑制する動機、原因、理由になると思うかを、「非常になる」(5点) から「全くならない」(1点) までの5段階で評定するように、別の105名の男女大学生に求めた。そのようにして得られた評定値のデータに主成分分析を適用し、その解をバリマックス回転して、以下の5種類の抑制要因 (非援助動機) を明らかにした (表5)。なお、この研究でいう抑制要因とは、向社会的行動を生起させない動機、原因、理由のことである。

- ① 「行動抑制的状況判断 および 非援助出費や援助報酬の非予想」：援助を求める原因がその人自身にあり、自分自身で切り抜けるべきであり、他人がわざわざ関わって助ける必要はないと判断される。自分の知人なら多少違うが、知らないそのような人を助けても得るものはなく、逆に、助けなくとも、他の人は何もいわないだろうと予想される。
- ② 「援助または被援助の好ましくない経験」：今までに他者を援助したり、他者から援助さ

れたりしたことがあまりなく、それに伴う好ましい経験がほとんどない。あるといえば、それは、例えば、誰一人援助していないときに、自分がそれをして、目立って恥しい思いをしたといった嫌な思い出だけであり、それゆえに他者を助けようという考えがない。

- ④ 「援助者もしくは被援助者の好ましくない人格特徴」：被援助者が身体的外観や人格特性などの点で好ましくない特徴を持っており、その人が嫌いである。あるいは、援助者が他者のことを思いやることのできない利己的な人物である。したがって、その人を援助する考えはない。
- ④ 「責任の分散可能性」：援助できる人が自分以外にも何人かそこにいるし、また、彼らに較べて自分は援助の必要な人から遠く離れている。あるいは、誰かが既にその人を援助しているので、自分の援助はもはや必要でないと思う。
- ⑤ 「援助能力の欠如」：援助する能力や資格が自分にはないと思う。あるいは、能力や資格はあるが、援助するために犠牲にすること（出費）がそれらに較べて、大きいと予想されるので、援助しない方が得だと考える。

(4) 高木修・竹村和久（1984）による促進要因（援助動機）と抑制要因（非援助動機）の関連性の研究

向社会的行動の生起を促進する要因と抑制する要因とは、定義的には、一つの次元上で逆の位

表6 援助動機と非援助動機の関連分析で用いられた12種類の向社会的行動（高木・竹村，1984）

No.	行 動 群 名	研究で用いられた向社会的行動
1	寄 付 ・ 奉 仕 行 動	困っている人のためにボランティア活動に参加する
2	分 与 行 動	困っている人に自分の持物を分け与える
3	緊急事態における救助行動	乱暴されている人がいたので、その人を助けるために警察へ通報する
4	努力を必要とする援助行動	自動車が故障して困っている人がいたので、その人を手助けする
5	迷子・遺失者に対する援助行動	迷子がいたので、その子を交番に連れていく
6	社会的弱者に対する援助行動	電車の中に重そうな荷物を持っている人がいたので、その人のためにその荷物を網棚にのせてあげる 子供が自転車でころんだので、その子を助けおこす 身体の不自由な人が困っていたので、その人のために援助の手をさしのべる
7	小さな親切行動	カメラのシャッター押しをたのんでくる人がいたので、シャッターを押してあげる 雨の日、カサを持ってなくて困っている人がいたので、その人にカサをさしかけてあげる 小銭がなくて困っている人がいたので、両替をしてあげる 自動販売機の使い方がわからなくて困っている人がいたので、その人に自動販売機の使い方を教えてあげる

表7 援助動機と非援助動機の関連構造(回転後因子負荷行列)(高木・竹村, 1984)

援助動機	F I	F II	F III	F IV	F V	F VI	F VII	F VIII	F IX	F X	F XI	F XII	F XIII	H
報酬や返礼が期待できたから	.060	-.166	.138	.084	-.176	.098	.110	.409	.064	.029	-.025	-.022	-.261	.296
無意識に	.028	.128	-.127	-.178	-.132	.080	.057	.128	-.173	-.025	.132	.122	-.105	.170
その時気分が良かったので	-.080	-.212	.130	-.127	-.534	.112	.215	.101	.026	-.050	.111	-.013	-.028	.359
今までの援助に成功して良い気持ちになったことだから	.047	.105	.013	.019	-.594	-.039	-.166	-.002	.007	.007	-.324	.094	-.184	.493
援助が必要だと思ったので	.014	.586	-.065	-.162	-.020	.012	.005	-.032	.008	.022	-.043	.002	-.056	.356
援助を求めめる原因がむしろ自分であり、援助の責任を感じたので	-.120	.257	.079	.007	.214	.020	.144	.439	.187	.048	-.118	.245	-.014	.357
他の人が援助していたので	.275	.142	.015	.106	-.068	-.039	-.082	.259	.180	.030	.049	.252	.112	.291
今までの援助したことがあったので	.161	.034	-.028	-.144	.316	-.110	-.201	-.039	.211	.104	-.228	.235	.063	.377
気の毒に思ったので	.073	.607	.088	-.139	-.032	.008	.050	-.056	-.023	.003	.014	-.058	.025	.358
自分の他に誰もそこにいなかった	.026	.179	.020	-.697	.049	-.016	-.051	.044	-.049	-.030	.065	.015	-.038	.431
援助する義務が自分にあると思ったので	-.029	.521	-.113	-.067	.008	.019	-.047	.236	.075	-.006	-.020	.115	-.036	.376
援助しないためにこらむコストが大きかった	.008	-.043	.023	.004	.051	-.060	-.031	.667	.017	-.013	-.066	-.027	.040	.309
(Xが)思いやりのある愛他的な人だから	-.040	.228	.184	.041	-.239	-.137	.016	.008	.032	-.141	-.059	-.133	.040	.246
直接援助を要請されたので	-.042	-.028	.211	-.344	.028	-.109	.128	-.020	.139	-.031	.017	-.042	.025	.218
何か良いことをしてみたから	.035	.175	.028	.110	-.613	.041	-.004	.107	.045	-.001	-.047	.012	.024	.430
他者の目が気になったので	.140	.081	.080	-.024	-.190	.012	.021	.450	-.103	.047	.004	-.039	.020	.273
援助に必要なコストが小さかった	-.179	-.204	.037	-.214	-.172	.068	.023	.328	.047	-.007	-.042	-.126	.123	.237
援助する能力や資格が自分にあると思ったから	-.118	.124	-.013	.170	-.143	.034	-.032	.092	.423	-.002	.059	.146	.075	.293
誰一人として援助しようとしなかった	-.055	.371	.016	-.450	.035	.041	-.049	.036	.008	.035	-.032	.008	.025	.362
今までの援助されたことがあったから	-.083	.147	.165	.118	-.239	.048	-.172	-.086	.004	.045	-.321	.128	-.024	.293
(Yの)近くにいたので	.026	.090	.047	-.572	-.046	-.028	.010	-.270	-.010	.050	-.023	.031	.015	.340
(Yが)好ましい特徴を持っていたので	-.017	-.003	.620	.013	.153	.086	-.087	.049	-.098	-.085	-.020	.036	-.068	.497
(Yが)好きな人だから	.005	.027	.887	.092	.032	.032	-.001	.037	-.034	-.064	.014	.005	-.043	.563
(Yが)自分の知っている人だから	.089	-.054	.577	.167	.102	-.012	.063	.032	.058	-.037	.039	.009	.080	.354
お互いに助け合わねばならないと思った	-.013	.379	.021	-.062	-.226	-.025	-.085	-.056	.071	-.038	-.021	.139	.231	.305

(表7のつづき)

非 援 助 動 機	F I	F II	F III	F IV	F V	F VI	F VII	F VIII	F IX	F X	F XI	F XII	F XIII	H
その時の気分が悪かったので	.012	-.149	-.104	.016	-.128	.001	.249	.037	.163	-.162	-.131	.015	.037	.215
目立つのが恥ずかしかったので	.529	.054	.039	.009	-.087	.053	.261	.033	-.060	.003	-.092	.007	.152	.368
今までの援助を求めて拒否されたことがあったから	.079	-.022	-.014	.056	.054	.065	.074	.086	-.074	.047	-.631	-.019	.048	.376
(Yから) 遠く離れていたので	.178	-.042	-.005	-.140	-.041	.013	.400	-.025	-.018	-.091	-.153	-.101	-.042	.309
誰一人として援助しようとしなかったから	.622	.028	.007	.048	.064	.024	-.084	.084	.011	-.033	-.052	-.004	-.017	.375
自業自得であり、自分に関係ないと思ったので	.064	-.002	.062	-.035	.061	.653	-.134	.031	-.023	-.108	.002	.037	.032	.433
他者がどのように思うか気にならなかったから	.144	-.036	-.054	-.016	-.012	.228	-.008	.064	-.095	-.003	-.172	.185	.264	.269
援助しないためにこらむコストが小さかったから	.127	-.028	-.056	-.015	.010	.209	-.165	.086	.400	.055	.128	-.383	.250	.369
(Yが) 自分の知らない人だったから	.484	-.106	.108	-.049	.009	.158	-.024	-.094	.002	-.147	-.066	-.010	.022	.408
援助が必要だと思わなかったから	-.086	.092	-.019	.065	-.031	.497	.286	-.050	.082	.011	-.070	.034	-.101	.278
自分以外にも誰かそこにいたので	.465	-.024	-.069	.226	.054	.013	.035	.029	-.011	-.085	-.055	-.184	-.148	.373
自分の難儀は自分で切り抜けるべきだと思ったので	-.044	-.001	.028	.027	.010	.717	-.003	-.016	.018	-.011	-.028	.007	.056	.408
報酬や返礼が期待できなかつたから	.144	-.181	-.016	.025	-.015	.332	-.300	.126	.070	.106	-.093	-.060	.006	.366
(Xが) 思いやりのない利己的な人だから	-.050	.157	.033	.020	-.022	-.164	.024	-.010	.054	-.487	-.043	-.082	-.018	.270
関わりたくなかつたから	.395	.200	-.028	.003	-.042	.093	-.092	.053	.087	-.182	.046	-.309	-.081	.454
援助する能力や資格が自分にならなかつたから	.066	-.029	-.011	.096	.017	.101	.043	-.011	.586	.019	.020	-.068	-.034	.260
今までの援助に失敗していいやな気持ちになつたことがあつたから	.023	.005	-.036	.023	.012	.012	.072	.073	.033	-.140	-.615	.009	-.036	.400
面倒だったから	.214	-.012	-.083	-.108	-.180	.136	-.029	-.088	.088	-.174	.021	-.431	-.100	.455
今までの援助したことがなかつたから	.456	-.038	-.063	-.004	.014	-.012	-.124	-.034	.330	.019	-.169	-.003	-.012	.365
(Yが) 好ましくない特徴を持っていたので	.047	-.074	.057	.005	.042	.109	-.047	-.032	-.064	-.798	-.003	.104	-.009	.578
直接援助を要請されなかつたので	.239	-.151	.037	-.065	-.091	.140	.130	.156	.125	.074	-.088	-.102	-.049	.304
(Yが) 嫌いな人だから	-.018	-.079	.068	-.008	.035	.094	-.012	-.001	-.075	-.873	-.003	.109	.037	.601
他の人が援助していたので	.023	.016	-.009	-.247	.027	-.028	.200	-.059	-.002	.043	-.229	-.184	-.228	.250
援助に必要なコストが大きかつたので	-.044	.171	-.013	.206	.113	.145	.021	.149	.236	-.131	-.111	-.306	.033	.303
援助する義務が自分にならなかつたので	.178	.066	-.018	.037	-.093	.483	-.013	-.083	.136	-.091	.035	-.095	-.043	.397
おせっかいと思われたいなかつたから	.338	.069	-.007	-.006	-.115	.206	.299	-.027	-.114	-.022	-.147	.001	.054	.360
固 有 値 (EIGEN VALUE)	6.921	4.399	2.752	2.602	1.778	1.711	1.635	1.534	1.345	1.245	1.183	1.059	1.023	29.186
寄 与 率 (PCT OF VAR)	13.6	8.6	5.4	5.1	3.5	3.4	3.2	3.0	2.6	2.4	2.3	2.1	1.9	57.2

置にあると考えられる。したがって、因子分析を別個に行うと、同じ構造が得られると予想される。しかし、以上の(2)と(3)の研究から判断すると、抑制要因の構造は、促進要因のそれよりもかなり入り組んでおり、それらの対応関係がかなり複雑であることが暗示されている。

そこで、高木らは、促進要因と抑制要因の間の関連性の究明を試みた。まず、高木(1982)が解明した7つの向社会的行動群を代表する12種類の行動(表6)を選び、その各々において、(2)の研究で用いた25種類の促進要因と(3)の研究で用いた26種類の抑制要因が、どの程度その行動の生起、あるいは、非生起の動機、原因、理由になると思うかを、「非常になる」(5点)から「全くならない」(1点)までの5段階で評定することを191名の男女大学生に求めた。そして、その評定値をもとに、要因間の相関係数を算出し、この値の検討に加えて、因子分析法、グループ主軸法、正準相関分析などの多変量分析法を用いて、促進要因と抑制要因との間の関連性を検討した。因子分析の結果(表7)、逆の関係、すなわち、その要因が存在すれば援助行動が促進されるが、存在しなければ抑制されるといった一次従属の関係にある要因(「援助能力・資格の有無」と「援助・被援助経験の有無」)もいくつかあるが、多くの要因は、互いに一次独立の関係、すなわち、援助行動の促進にのみ、あるいは、抑制にのみ関わるということが明らかとなった。つまり、字義的には逆の関係にあると推定される促進要因と抑制要因とが、必ずしもそのように対応していない場合が多いのである。この事実は、研究者が、向社会的行動の生起過程を研究する際は、促進要因と抑制要因の両方を検討しなければならないことを示唆している。それは、もし両要因が一次従属、つまり逆の関係にあるのなら、どちらか一方を検討すればいいのだが、多くの要因は一次独立の関係にあるために、両者を吟味しなければならないということである。

(5) 高木修(1983;1987a)による促進要因(援助動機)と抑制要因(非援助動機)に基づく行動類型の特徴づけ

前述のように、高木は、(2)の研究によって、行動の生起を促進する6要因(援助動機)を、(3)の研究によって、行動の生起を抑制する5要因(非援助動機)を明らかにした。高木は、それらの要因の特性から向社会的行動、特にその行動類型(クラスター)を特徴づけることを試みた。そのために、まず、12種類の行動各々についての各被験者の評定に基づいて、促進要因と抑制要因の簡便因子得点を被験者毎に算出し、さらにそれを12種類の行動がそれぞれ所属する7つの行動類型にまとめた(表8、表9)。そこに示された得点の大きさは、その因子が行動生起の促進に、あるいは抑制に強く関わる程度を意味する。その観点からの7つの行動類型の特徴は以下の通りである。

① 寄付・奉仕行動

この群の行動の促進には、「促進的な状況判断」「援助または被援助の好ましい経験」「援助者もしくは被援助者の好ましい人格特徴と援助者の良き感情状態」などが少し関与している。他方、抑制には、「援助または被援助の好ましくない経験」が強く関与し、「抑制的な状況判断」

表 8 向社会的行動群の援助動機特性（因子得点の平均と標準偏差）（高木，1983）

行動群 番号	援助動機型 番号 行動群名	1		2		3		4		5		6	
		平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差
1	寄付・奉仕行動	.167	1.011	-.708	1.024	.161	.889	.148	.860	-.250	.908	-.297	1.053
2	分与行動	-.110	.986	-.210	.907	-.034	.884	.153	.808	-.127	.988	.416	.572
3	緊急事態における 救助行動	.594	.763	.526	.916	-.306	1.173	-.951	1.074	-.010	1.056	-.053	1.124
4	努力を必要とする 援助行動	-.113	1.004	-.356	.994	.121	.908	-.007	.837	-.004	.960	.532	.590
5	迷い子・遺失者に 対する援助行動	-.327	1.069	-.368	.855	.388	1.021	-.032	.847	.713	.945	-.415	1.128
6	社会的弱者に 対する援助行動	-.074	.917	.352	.853	-.036	.969	.369	.908	.015	.928	-.043	.967
7	小さな親切行動	-.374	1.003	.121	.802	-.040	.961	.192	.822	-.054	1.036	.148	.920

表 9 向社会的行動群の非援助動機特性（因子得点の平均と標準偏差）（高木，1987 a）

行動群 番号	非援助動機 型番号 行動群名	1		2		3		4		5	
		平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差
1	寄付・奉仕行動	.167	.712	.416	.521	-.087	.733	-.528	.670	.153	.642
2	分与行動	.342	1.116	-.211	.820	.190	.906	.401	.562	.551	.975
3	緊急事態における 救助行動	-.321	.574	-.696	.586	-.601	.612	-.114	1.065	-.265	.560
4	努力を必要とする 援助行動	.245	.861	-.191	.727	.367	.827	.400	.631	.277	.815
5	迷い子・遺失者に 対する援助行動	.370	1.083	-.517	.827	.011	1.019	-.701	.971	-.408	.785
6	社会的弱者に 対する援助行動	-.212	.798	.611	.472	.162	.721	.141	.474	-.117	.670
7	小さな親切行動	-.008	.760	-.173	.527	.161	.828	.380	.530	.076	.929

と「援助能力の欠如」もいくらか関与している。したがって、このクラスターの行動の場合、援助経験の善し悪しと援助状況の判断結果が行動を分ける重要なポイントのようである。

② 分与行動

この群の行動の促進には、「援助者と被援助者との近い関係」が強く関与しており、「援助者もしくは被援助者の好ましい人格特徴と援助者の良き感情状態」も少し関係している。他方、抑制には、「援助能力の欠如」「責任の分散可能性」「抑制的状況判断と非援助出費や援助報酬の非予想」がかなり強く関わっている。規範が行動実行をあまり指示していない上にかんがりの出費を覚悟しなければならないこの群の行動の場合、援助者と被援助者との間に近い関係が存



在し、しかも、援助する能力が自分にあり、その責任を回避できないときや、援助を求める理由が社会的に認められ、援助しないと嫌な結果がもたらされて困る、あるいは、援助するとよい結果が期待されると判断することがポイントのようである。

### ③ 緊急事態における救助行動

この群の行動の促進には、「促進的な状況判断」「責任の分散不可能性」が強く関与している。つまり、他者も自分自身もその実行を強く期待し、行動責任が回避できないので、援助するのである。他方、抑制には、抑制要因の研究で得られたいかなる動機、原因、理由も関わっていない。規範が強くその実行を指示するこの群の行動を実行しないのは、よほどの理由があるのだろうが、それが何かはここでは分からない。

### ④ 努力を必要とする援助行動

この群の行動の促進には、「援助者と被援助者との間の近い関係」が強く関わっている。つまり、例えば、知人、友人といった心理的に近い関係の人々の間で生じやすいのである。他方、抑制には、「援助または被援助の好ましくない経験」以外の全ての抑制要因が関わっており、規範の指示の弱いこの群の行動の場合、多くの理由によって行動生起が抑制されるようである。

### ⑤ 迷い子や遺失者に対する援助行動

この群の行動の促進には、「非援助出費や援助報酬の予想」が非常に強く関与しており、「援助者もしくは被援助者の好ましい人格特徴および援助者の良き感情状態」もいくらか関わっている。つまり、例えば、遺失物を届けないと社会的非難が及んでくるし、届けると、いくらかの報酬が期待できるのである。届けるかどうかは、援助者の人格特徴やそのときの感情状態が左右するというのである。他方、抑制には、「抑制的状況判断 および 非援助出費や援助報酬の非予想」が関係している。例えば、遺失の理由が認められないで、しかも届けなくとも非難を恐れる必要がなかったり、届けても何の報酬も期待できないときに、この行動は生起しないのである。出費と報酬の期待が行動を分ける重要なポイントのようである。

### ⑥ 社会的弱者に対する援助行動

この群の行動の促進には、「援助者もしくは被援助者の好ましい人格特徴 および援助者の良き感情状態」と「責任の分散不可能性」とが関与している。例えば、被援助者が感じのよい人であったり、援助者が愛他的な人であると、また、自分以外にその場に誰もいないとかその人の近くに自分がいるために援助責任が回避できないので、援助するのである。他方、抑制には、「援助または被援助の好ましくない経験」が強く影響している。つまり、目立つのが嫌だとか、援助に失敗して以前のように恥しい思いをしたくないために、あるいは、このような場合に自分自身は援助されたことが今までにないので、援助しないというのである。

### ⑦ 小さな親切行動

この群の行動の促進には、強く関与する動機、原因、理由がなく、「援助者もしくは被援助

者の好ましい人格特徴および援助者の良き感情状態」が幾らか関わっているようである。規範がその実行を指示しないため、行動の生起は、援助者の一時的あるいは持続的な特性や、被援助者の特性に依存しているのであろう。他方、抑制には、「責任の分散可能性」がかなり強く関係している。すなわち、自分以外に誰かがその場にいるとか、誰かが助けているとか、自分はその場から遠く離れているといった理由で、援助しないで済まそうとするのである。

## 2. 向社会的行動の規定要因の比較文化的研究

### 1) 向社会的行動の比較文化的研究

人々の行動は、彼らが所属する社会に特有な文化や階層などに独特な下位文化によって影響されている。したがって、社会的行動の生起を規定する要因とその規定の仕方にも種々の水準の文化差が存在するだろう。行動の文化的規定因の内でも最も重要な側面としてしばしば研究されてきたものに社会的規範があるが、典型的な社会的行動の一つである向社会的行動が、文化を反映して社会や階層に内在する規範によって統制されていることが既に証明されている。ところで、行動生起に関する文化差は、このような規範によるものに限定されない。規定因の種類や規定の程度や方向などにおいても文化差が存在すると考えられる。

高木修（1982, 1983, 1984, 1987a, 1987b, 1987c, 1991a）は、日本において向社会的行動の分類学的研究を行い、向社会的行動の類型、行動に関連する規範的態度および行動を規定する要因（動機、原因、理由）の各々の構造、ならびにそれらの間の関連性を明らかにした。しかし、それらの研究知見を比較文化的に検討していないために、それらが日本文化に特有なものか、それとも他の文化においても認められるものかが、はっきりしていない。この疑問に答えるためには、日本と文化を異にする国々において同一の手続きによる研究を行う必要がある。高木修（1991b, 1992, 1993）は、既に、米国において行った向社会的行動の分類学的研究の結果を報告し、行動類型、規範的態度、および行動の規定要因の文化差を明らかにしている。そこで、本研究では、比較研究として残されている問題、すなわち、向社会的行動の生起を促進する、あるいは抑制する要因（動機、原因、理由）の構造解明とそれに基づく行動類型の特徴づけを行うことにした。

### 2) 米国における向社会的行動の分類学的研究

#### (1) 比較研究の対象者

日本と比較する国としてアメリカ合衆国を選び、データ収集の便宜から、アメリカ南東部にあるノースカロライナ州立大学チャペルヒル校（UNC: University of North Carolina at Chapel Hill）の学部学生を対象者にして、研究を行った。特に同校を選んだのは、筆者が在外研究中に、一連の研究のデータを同一対象者から容易に収集できる同校の新しいデータ収集施設

「キャップス」(CAPS: Computer Administered Panel Survey) が利用できたからである。

チャペルヒル校は、UNC を構成する16校中の1つであり、その中心校として1795年に設立されアメリカ最古の州立大学であり、この研究が行われた当時(1987年から1988年)は、人文学系の6学部と健康・衛生学部から成る総合大学に発展していた。学生は、ノースカロライナ州出身の22,781人、他州出身の50人、そして、外国人の71人であった。この内、67%は学部学生、26%は大学院生、そして、7%は専門職養成コースの学生であった。女性が男性よりもやや多く、その比率は、57%対43%となっていた。

CAPS は、UNC の「社会科学研究所」(IRSS: The Institute for Research in Social Science) が1983年から1984年にかけて開発した研究施設であり、調査実施のコンピュータ化と縦断的調査の利点を兼備している。この大規模なデータ収集施設を利用すれば、研究者は、回答者を獲得する、面接を実施する、資料を保存するといったことを効率よく行うことができる。

学部学生の母集団を代表する95名(1987年度)のサンプルは、週に1時間半、学期中の20週の間、コンピュータの端末に回答したり、実験課題を完成したりすることを求められる。なお、各

表10 米国における類型化研究で用いられた向社会的行動(高木, 1991b)

- 
1. 誰かの勉強や宿題を手助けする
  2. 誰かの日々の雑用を手助けする
  3. 何処かまで誰かを車に乗せる
  4. 困っている誰かに何かを寄付する
  5. 誰かにお金を貸す
  6. 誰かに物を貸す
  7. 献血や臓器の提供をする
  8. 誰かの悩みや問題を聞いてあげる
  9. 慈善団体にお金や時間を寄付する
  10. 奉仕団体や基金の設立に志願する
  11. 老人や障害者の世話や、慰問をする
  12. 迷子になった誰かに道順を教える
  13. 誰かのためにノートをとったり貸す
  14. 問題を抱えている人に忠告を与える
  15. 誰かのためにドアを開けて、あるいは閉じないように持っていてあげる
  16. 事故の犠牲者や緊急事態で怪我をした誰かを援助する
  17. 誰かの荷物を持って運んであげる
  18. 誰かにお金や時間を無償で与える
  19. 誰かの引越しを手伝う
  20. 誰かのために食事を準備する
  21. 車のトラブルで困っている誰かを助ける
  22. 誰かを励ましたり慰める
  23. 拾得物を返還する
  24. 誰かに傘を貸して、あるいは差しかけてあげる
  25. 何かを拾っている、あるいは捜している誰かを助ける
- 

注：文頭の数字は、図2のそれに該当する。

サンプルの反応には被験者の ID 番号、性別、人種、学年、所属グループ名、誕生日などについての情報が付け加えられる。

CAPS では、全てのデータが SAS データ・ファイルに変換されて研究所のデータ・ライブラリーに保存されるので、自分のデータを再分析したり、一層詳細な分析を加えたり、自分や他者の実験を追試したり、媒介変数を変えて発展的追試をしたりすることが容易である。個人についての多量の、そして多様なデータは、種々の二次的な分析のための貴重な資料源とされる。

## (2) 米国における向社会的行動の類型化研究

高木（1991b）は、米国において生起が認められる向社会的行動を少数の類型に分けることを試みた。CAPS の94名のサンプルから、自分自身が経験、観察した向社会的行動を合計857個（一人平均9.1個）収集した。5回の内容分析を通じて、それらを25種類の典型的な向社会的行動にまとめた（表10）。

つぎに、25行動から順に2つの行動を選び出して対にし、対にされた行動がどの程度類似しているかを5段階で評定することを96名のCAPSサンプル（1988年度）に求めた。しかし、評定対総数が300個と非常に多いので、それらを評定者（24人）と評定対（75個）に無作為に4等分し、一人が1回25対を3回評定することにした。

4群のサンプルは等質であると仮定し、彼らの評定を統合して、25×25の距離（非類似度）マトリックスを作成した。そして、これに各種のクラスター分析法を適用し、25種類の向社会的行動の類型化を試みた。

ワードの最小分散法による分析結果（図2）では、クラスター分けの基準（平方セミパーシャル相関値）を0.04にしたところ、25種類の向社会的行動が以下のように8つのクラスター（群；類型）に分けられることとなった。

### 第1クラスター：「勉学に関連した援助行動」

勉強や宿題を直接手助けしたり、授業ノートを貸すなど

### 第2クラスター：「貸与的援助行動」

お金や物をそれを必要としている人に貸すなど

### 第3クラスター：「労働奉仕的援助行動」（3つの下位クラスターから成る）

「雑事での手助け行動」；日常の食事の準備や掃除を代わりにしてあげる

「自動車に関連した労働奉仕的行動」；車が故障したりして移動に困っている人をどこかまで乗せてあげる

「身体的労力を必要とする援助行動」；引越しなどで荷物の移動を手助けする

### 第4クラスター：「精神的、心理的援助行動」（2つの下位クラスターから成る）

「話や相談の相手になる思いやり行動」；問題を抱えて悩み苦しんでいる人の話の聞き手になる

「忠告や励ましの援助行動」；問題を抱えて悩み苦しんでいる人を励まし、忠告を与える



病気やケガで苦しんでいる人を助ける

(3) 米国における向社会的行動の促進要因と抑制要因の研究

高木（1993）は、向社会的行動の生起を促進する、あるいは抑制する要因の整理を試みた。まず、米国における典型的な向社会的行動の類型を参考に10種類の向社会的行動（表11の行動の欄を参照）を選定し、コンピュータの端末のスクリーン上にそれらを順番に提示し、CAPSの96名のサンプルに、各行動の生起を促進したと思う要因（動機、原因、理由）と抑制したと思う要因（動機、原因、理由）とを、それぞれ5個以内でリストアップすることを求めた。なお、それらの要因は、自分自身の考えによるものだけでなく、たとえ自分自身の考えを反映していなくても他人ならこう考えるだろうと想像したものであってもよいと教示した。

この結果、10種類の向社会的行動の生起を促進する動機、原因、理由として、合計3,221個（一人平均33.6個、一行動当たり3.4個）、他方、行動生起を抑制するものとして、合計3,101個（一人平均32.3個、一行動当たり3.2個）がリスト・アップされた（表11）。

今後の要因研究に使用するため、応答されたこれらの動機、原因、理由の内容分析を繰り返して、それらを一行動につき50個程度の代表的な動機、原因、理由にまとめた。さらに、それら内容の類似性から20個前後の要因カテゴリーで整理した。さらにくわえて、それらを10種類の行動間で比較し、その共通性から一般的に向社会的行動の生起を促進する、あるいは抑制する動機、原因、理由を推察した。

10種類の向社会的行動の全てに、あるいはその多くに共通する、また、CAPSの96名のサンプルの多くが応答した代表的な動機、原因、理由を要因カテゴリー別に整理し、行動生起を促進する代表的な要因として表12のように、抑制する代表的な要因として表13のようにまとめた。なお、促進的要因と抑制的要因の対応性を考慮して、実際には応答がなかった要因も表には記載してある。これらの表に基づいて、応答総数の多い要因カテゴリーの内容を、それらに所属する代

表11 行動生起の規定要因を収集するために提示した10種類の向社会的行動とサンプルが応答した行動規定要因の総個数（平均）

向社会的行動	促進要因数	抑制要因数
1. Donating money to a charity.	360(3.8)	328(3.4)
2. Lending money to a person who lost his purse.	332(3.5)	314(3.3)
3. Nursing a person who is sudden illness.	324(3.4)	314(3.3)
4. Helping a person who moves.	327(3.4)	330(3.4)
5. Handing over things lost or left behind to the owner.	326(3.4)	316(3.3)
6. Offering a seat to a handicapped person in a vehicle.	310(3.2)	304(3.2)
7. Making change for someone who has none.	282(2.9)	295(3.1)
8. Making way for a person on a narrow path.	300(3.1)	282(2.9)
9. Donating blood for a person in need.	335(3.5)	319(3.3)
10. Taking care of an old person.	325(3.4)	299(3.1)
	合計 3221(33.6)	3101(32.3)

表12 向社会的行为の代表的な促進要因 (高木, 1993)

援助者と被援助者 (援助要請者) の間の援助促進的關係 (1-419)

- Y is a friend of X. (225)
- Y is a relative of X. (146)
- Y knows X enough well. (48)

援助報酬の期待 (2-385)

- Y expects something in return. (184)
- It is benefit both of them. (56)
- Y wants X or others to see how kind Y is. (46)
- Y wants to feel good about himself. (39)
- Y needs tax wright-off/free. (35)

援助者の援助促進的人格特徴 (3-353)

- Y is a nice person. (146)
- Y is kind. (89)
- Y is courteous/polite. (70)
- Y is generous. (26)
- Y is honest. (22)

被援助者 (援助要請者) に対する援助者の思いやりの存在 (4-208)

- Y wants to help/get rid of X. (72)
- Y has compassion or sympathies with X. (53)
- Y feels sorry for X. (45)
- Y cares for/about X. (38)

援助に対する援助者の積極的態度 (5-185)

- Y knows that it is the right/worthy thing to help. (93)
- Y likes/wants to help others. (82)
- Y likes to follow public manners. (10)

援助への圧力や義務感の存在 (6-166)

- Y thinks that it is Y's job to help. (80)
- Y feels obligated/pressured to help. (60)
- Y feels threatened to help. (26)

援助者の援助能力や資格の存在 (7-161)

- Y has spare(extra) money/change. (76)
- Y has the skill, ability and knowledge to help X. (57)
- Y has same or much blood. (28)

援助の必要性の認識 (8-137)

- Y knows that X needs it/Y. (86)
- Y knows that it is important or emergency to X. (51)

被援助者 (援助要請者) に対する援助者の好意的態度 (8-137)

- Y loves X. (70)
- Y likes X. (47)
- Y trusts X. (20)

過去の援助への返報 (10-116)

- Y owes X a favor. (83)
- Y wants to reciprocate. (33)

非援助出費の予想 (11-73)

- Y expects guilty if no helping given. (45)
- Y wants to avoid a conflict. (28)

- 将来の援助への期待（12-63）  
Y may someday need some/same helping as well. (63)
- 被援助者（援助要請者）の援助促進的人格特徴（13-60）  
X is female, old or handicapped. (29)  
X is fat or bigger than Y. (28)
- 援助者の状況の援助促進的特徴（14-58）  
Y has nothing better to do. (22)  
Y is in a good mood/feeling. (16)  
No one else can help X. (13)  
Y is the only one nearby. (7)
- 援助出費の予想の欠如（15-56）  
It requires little effort for Y. (45)
- 有償の仕事としての援助（16-42）  
Y is (getting) paid to help. (42)
- 非援助報酬の期待の欠如（17-34）  
Y has no use for it. (34)
- 被援助者（援助要請者）の状況の援助促進的特徴（18-33）  
X can't do anything. (16)  
X is carrying something. (12)  
X is in a hurry. (5)
- 直接的な援助要請の存在（19-32）  
X asked Y to help. (32)
- \* 被援助者（援助要請者）に対する援助者の非好意的態度（20-15）  
X looks mean. (8)  
Y dislikes X. (7)
- 罪障感の低減の必要性（21-8）  
Y is for that cause. (8)
- 過去の援助経験の存在（21-8）  
Y has the same/similar experience in helping. (8)
- 無意識の援助（23-7）  
Y does it instinctively. (7)
- 過去の被援助経験の存在（24-2）  
Y has the experience being helped. (2)
- 過去の被援助経験の欠如（24-2）  
Y has the experience not being helped. (2)
- 援助要請の好ましい仕方（24-2）  
X is pleasant in his approach. (2)
- 過去の援助経験の欠如（27-0）  
Y has no experience in helping. (0)

---

注：表中の（ ）内の数は、要因カテゴリーについては、応答数の順位とその総数を、要因については、応答数を表わす。



表13 向社会的行動の代表的な抑制要因 (高木, 1993)

- 
- 援助者の援助能力や資格の欠如 (1-702)
- Y doesn't have any/enough money/change. (234)
  - Y is tired, ill or injured. (114)
  - Y doesn't know how to help or what to do. (106)
  - Y needs it him(her)self. (82)
  - Y is old or handicapped. (75)
  - Y can't afford to. (73)
- 被援助者 (援助要請者) に対する援助者の非好意的態度 (2-384)
- Y dislikes X. (220)
  - Y hates X. (83)
  - Y doesn't trust/believe X. (48)
  - Y wants X to suffer or die. (33)
- 援助者の状況の援助抑制的特徴 (3-289)
- Y. has no time. (158)
  - Y doesn't see or notice X. (59)
  - Y has better/other thing to do. (44)
  - Y is in a bad mood/feeling. (20)
- 援助者の援助抑制的人格特徴 (4-247)
- Y is mean/stingy/greedy. (93)
  - Y is selfish. (76)
  - Y is a jerk. (40)
  - Y is lazy/rude/disrespect. (38)
- 援助出費の予想 (5-201)
- Y is afraid that he would get something wrong. (82)
  - Y is afraid of helping. (73)
  - Y is afraid that he would do something wrong. (27)
  - Y doesn't want to be bothered. (19)
- 援助の必要性の認識の欠如 (6-167)
- Y doesn't think that X needs help. (131)
  - Y expects that someone else will help X. (29)
  - Y knows that someone else is already helping X. (7)
- 援助に対する援助者の消極的態度 (7-153)
- Y doesn't want to help others. (96)
  - Y doesn't believe that helping is worthwhile. (57)
- 援助者と被援助者 (援助要請者) の間の援助抑制的關係 (8-125)
- Y doesn't know X enough well. (102)
  - Y is not a friend of X. (10)
  - X is an enemy of Y. (10)
- 非援助報酬の期待 (9-86)
- Y wants to keep what X lost. (75)
- 被援助者 (援助要請者) に対する援助者の思いやりの欠如 (10-75)
- Y doesn't care about/for/to X. (64)
  - Y has no compassion or sympathies with X. (10)
  - Y doesn't feel sorry for X. (1)
- 援助報酬の期待の欠如 (11-47)
- Y can't expect anything in return. (41)

(表13のつづき)

- Y thinks that it is not tax deductible. (6)
- 過去の非援助への報復 (12-35)
- X didn't help when Y needed it. (32)
- Y wants revenge on X. (3)
- 過去の援助経験の存在 (13-25)
- \* Y has already helped others. (23)
- Y has a previous bad experience in helping. (2)
- 被援助者 (援助要請者) の援助抑制的人格特徴 (14-21)
- Y thinks that X is careless or irresponsible. (11)
- X is ugly. (6)
- 援助要請の好ましくない仕方 (15-18)
- Y feels that he is being pushed to do so. (9)
- X got on Y's nerves. (5)
- X doesn't ask for help politely enough. (4)
- 非援助出費の予想の欠如 (16-12)
- Y doesn't think that X will find it out. (12)
- 将来の援助への期待の欠如 (16-12)
- Y feels that X will not help him if he needs it. (12)
- 援助への圧力や義務感の欠如 (16-12)
- Y doesn't feel obligated to help. (9)
- Y feels no social responsibility to help. (2)
- 直接的な援助要請の欠如 (19-10)
- X didn't ask Y to help. (10)
- 過去の援助経験の欠如 (20-8)
- Y has never helped others. (8)
- 代替援助の可能性 (20-8)
- Y donates other helping for X. (5)
- Let somebody else do it. (3)
- 無償ゆえの非援助 (22-4)
- Y is not getting paid to. (4)
- 過去の被援助経験の欠如 (22-4)
- No one helped Y when he needed it. (4)
- 被援助者 (援助要請者) の状況の援助抑制的特徴 (24-3)
- X is injured too serious. (3)
- 援助の忘却 (24-3)
- Y forgets about helping. (3)
- 被援助者 (援助要請者) に対する援助者の好意的態度 (26-0)
- Y feels that X is attractive. (0)
- 罪障感の低減の不必要性 (26-0)
- Y is not for that cause. (0)
- 過去の被援助経験の存在 (26-0)
- Y has the experience being helped. (0)

---

注：表中の ( ) 内の数は、要因カテゴリーについては、応答数の順位とその総数を、要因については、応答数を表わす。

表的な促進要因と抑制要因から検討した。

向社会的行動の生起を促進する要因（動機，原因，理由）として最も応答総数の多かった要因カテゴリーは「援助者と被援助者（援助要請者）の間の援助促進的關係」（応答総数は，419個である。以下同様に記述）である。これに属する要因として，“YとXが友人，知人，恋人，もしくは親戚の關係にあるように，未知の關係よりも既知で，しかも心理的に近い關係にある時に援助が促進される”ということである。これに次いで応答総数の多いカテゴリーが「援助報酬の期待」（385個）であり，これには“援助することによって被援助者や第三者から物質的あるいは社会的・心理的見返りが期待できたり，自己報酬が望める時に援助が促進される”ということである。第3番目のカテゴリーは「援助者の援助促進的人格特徴」（353個）である。これは，“Yがどんな人に対しても思いやりがあり，親切で，気前がよく，礼儀正しく，あるいは正直だと，Yはよく援助する”ということである。第4番目のカテゴリーは「被援助者（援助要請者）に対する援助者の思いやりの存在」（208個）である。これは，“YがXに同情し，Xのことを気に掛け，心配し，Xを助け，嫌な状態からXを解放してあげたいと願っていると，YはXを援助し易い”ということである。第5番目のカテゴリーは「援助に対する援助者の積極的態度」（185個）である。これは，“援助することは価値があり，正しいことであり，良き社会の風習に従うことであるとYが考え，そうすることの義務を感じ，またそうすることを望んでいると，Yは援助し易い”ということである。第6番目のカテゴリーは「援助への圧力や義務感の存在」（166個）である。これは，“援助することの義務やそれへの圧力を感じる時，あるいは，Xが恐くて，援助するようにXから脅かされていると感じている時に，Yは援助し易い”ということである。第7番目のカテゴリーは「援助者の援助能力や資格の存在」（161個）である。これは，“援助するために必要な技能や知識，物質的余裕，あるいは身体的能力が自分にあると思われる時に，Yは援助し易い”ということである。第8目のカテゴリーは「援助の必要性の認識」と「被援助者（援助要請者）に対する援助者の好意的態度」（137個）とである。前者は，“Xが緊急事態にあり援助を必要としており，援助が重要であると感じた時に，Yは援助し易い”ということであり，後者は，“YがXを愛しているとか信頼しているとかのようにXに好意を持っている場合に，Yは援助し易い”ということである。第10番目のカテゴリーは「過去の援助への返報」（116個）である。これは，“Yが以前Xから恩恵を受けており，Xに返礼したいと願っている場合に，YはXを援助し易い”ということである。第11番目のカテゴリーは「非援助出費の予想」（73個）である。これは，“Xを援助しないと罪の意識に悩むだろうとか，両者の対立や抗争に発展するということが予想され，それを回避するために，Yは援助し易い”ということである。第12番目のカテゴリーは「将来の援助への期待」（63個）である。これは，“将来自分も同様の援助を必要とするかもしれない，その時援助してもらえようと，Yは援助する”ということである。第13番目のカテゴリーは「被援助者（援助要請者）の援助促進的人格特徴」（60個）である。これは，“Xが女性であったり，老人や障害者といった社会的弱者であるとき，Yは援助し易い”という

ことである。第14番目のカテゴリーは「援助者の状況の援助促進的特徴」（58個）であり、“Yには行わねばならないことが援助以外にはない、Yがよい気分や感情状態にある、誰もXを援助していない、自分が最もXの近くにいる、といったような場合に、Yは援助し易い”ということである。第15番目のカテゴリーは「援助出費の予想の欠如」（56個）である。これは、“援助が容易で、そのためにはほとんど努力を必要としない場合に、Yは援助し易い”ということである。以上の他にもいくつかの援助促進要因があるが、紙数の関係で省略する。

つぎに、向社会的行動の生起を抑制する動機、原因、理由として最も応答総数の多かったカテゴリーは「援助者の援助能力や資格の欠如」（702個）である。このカテゴリーに属する抑制要因は、“援助するために必要な技能や知識、物質的余裕、あるいは身体的能力が自分にないと思われる時、Yは援助し難い”ということである。これに次いで応答総数の多いカテゴリーが「被援助者（援助要請者）に対する援助者の非好意的態度」（384個）である。これは、“YがXを嫌い、憎み、あるいは信用しておらず、Xが苦しんだり、死んでしまうことさえ願っている時、YはXを援助しようとはしない”ということである。第3番目のカテゴリーは「援助者の状況の援助抑制的特徴」（289個）である。これは、“Yには他にすることがあって、援助のために時間が割けないとか、何らかの理由で困っているXに気づかないとか、気分や感情が悪い状態にYがいるような場合、Yは援助し難い”ということである。第4番目のカテゴリーは「援助者の援助抑制的人格特徴」（247個）である。これは、“利己的、けちで貪欲、愚か者、怠惰、思いやりのない、あるいは、粗野で無作法、といった特徴をYが持っている時、Yは援助し難い”ということである。第5番目のカテゴリーは「援助出費の予想」（201個）である。これは、“援助するために、例えば、苦痛に耐える、お金を失う、病気になる、親しい人を失う、恥ずかしい思いをするといった犠牲が伴うと予想する時、Yは援助し難い”ということである。第6番目のカテゴリーは「援助の必要性の認識の欠如」（167個）である。これは、“Xには援助が必要でないとか、Xが援助に値しないと思う、あるいは、誰かが既に援助したり、いずれ援助するので援助は必要でないと考えた場合、Yは援助し難い”ということである。第7番目のカテゴリーは「援助に対する援助者の消極的態度」（153個）である。これは、“他者を援助することが嫌いで、援助が価値のあることとは考えない場合、Yは援助し難い”ということである。第8番目のカテゴリーは「援助者と被援助者（援助要請者）の間の援助抑制的關係」（125個）である。これは、“YがXのことをよく知らず、両者が友人関係になく、むしろ敵対関係にある場合、YはXを援助し難い”ということである。第9番目のカテゴリーは「非援助報酬の期待」（86個）である。これは、“援助しないことによって好ましい結果がもたらされると期待できる時に、YはXを援助しない”ということである。第10番目のカテゴリーは「被援助者（援助要請者）に対する援助者の思いやりの欠如」（75個）である。これは、“XにYが同情、共感したり、Xのことを気に掛けて心配したりする気持ちがないと、YはXを援助しようとしにくい”ということである。第11番目のカテゴリーは「援助報酬の期待の欠如」（47個）である。これは、“援助しても何らの見返りも期待できない

とか、相手から感謝されることもないと思われる時、YはXを援助しようとはしない”ということである。第12番目のカテゴリーは「過去の非援助への報復」(35個)である。これは、“かつてYが助けてほしい時にXが援助せず、このことでXに仕返しをしたいと願っているような場合、YはXを援助しない”ということである。第13番目のカテゴリーは「過去の援助経験の存在」(25個)であり、“もう既に自分は他者を十分に援助しているとか、過去に援助して嫌な経験があるような場合、YはXを援助しようとはしない”ということである。第14番目のカテゴリーは「被援助者(援助要請者)の援助抑制的人格特徴」(21個)であり、“Xが醜いとか、不注意、無責任、あるいは残酷、無慈悲であると思う時、YはXを助けようとはしない”ということである。第15番目のカテゴリーは「援助要請の好ましくない仕方」(18個)である。これは、“Xが丁寧に援助を要請せず、援助を強制するように受け取られ、Yの気分を害するような場合、YはそのようなXを助けようとはしない”ということである。以上の他にもいくつかの援助抑制的要因のカテゴリーがあるが、紙数の関係で省略する。

以上が向社会的行動の生起を促進、または抑制する動機、原因、理由である。向社会的行動の生起において日頃しばしば問題になる要因は多くのサンプルによって応答されると考えられる。したがって、応答数の多い要因は援助行動の生起において比較的重要な意味を持っていると考えられる。その中でも援助の促進と抑制のいずれにおいても共通して比較的重要な要因と促進か抑制かのいずれかにおいて比較的重要な要因との2つのタイプがある。前者の要因としては、援助者の援助に関係する人格特徴、援助に対する態度、および援助の必要性の認識とがある。すなわち、援助者が援助を促進(抑制)するような人格特徴や援助に対して積極的(消極的)な態度を持っていれば、また、援助が必要(不必要)であると状況を認識すれば、援助が起り易い(難しい)ということである。他方、後者の促進あるいは抑制のいずれかで比較的重要な要因の内で、抑制よりも促進の方向で比較的重要な要因としては、援助者と被援助者(援助要請者)の間に援助を促進する関係があること、援助報酬が期待できること、および被援助者(援助要請者)に対して援助者が思いやりを持っていること、援助するよにとの圧力や援助しなければならないという義務感の喚起が存在することがある。すなわち、両者が親密な関係にあり、援助することから報酬が期待でき、被援助者(援助要請者)に対して思いやりを持ち、援助する方向への圧力や義務感が存在すると、援助が促進されることを暗示している。さて、促進よりはむしろ抑制の方向で比較的重要な要因としては、援助者の援助能力や資格の欠如、被援助者に対する援助者の非好意的態度、援助者の状況の援助抑制的特徴、援助出費の予想、そして、非援助報酬の期待とがある。すなわち、援助者に援助能力や資格が欠如している、被援助者に対して援助者が非好意的態度を持っている、援助者の状況に援助を抑制する特徴がある、援助出費が予想される、そして、非援助報酬が期待できないと、援助が抑制されることを暗示している。

### 3. 規定要因の構造説明とそれに基づく行動類型の特徴づけ

高木（1993）によって、向社会的行動の生起を促進する、あるいは抑制する種々の要因（動機、原因、理由）が明らかにされたので、本研究では、それらの要因間の関連構造を明らかにし、その構造に基づいて、高木（1991b）が明らかにした向社会的行動の8つの類型（クラスター）を特徴づける。さらに、それらの結果を日本における研究（高木、1983；1987b）の結果と比較する。

#### 1) 向社会的行動の促進要因と抑制要因の構造説明

##### (1) 方法

##### a) 比較研究の調査対象者

高木（1991b, 1993）の研究結果に対応すべく、この研究では、日本と比較する国としてアメリカ合衆国を選んだ。そして、アメリカ東部、コネティカット州のストーにあるコネティカット大学（University of Connecticut at Storrs）の学部学生で、入門心理学を受講する男女学

表14 調査に应答することへの同意書

---

#### Informed Consent

I, \_\_\_\_\_, hereby consent to my participation in the following research project:

Title of Project: Reasons for Helping and Not-Helping Behavior

Project Director: Jeffrey D. Fisher, PhD, Professor

The purpose of this project is to determine what reasons for various helping and not-helping behaviors you think are likely. You will be asked to fill out a questionnaire in which you rate the likelihood that someone will help or not help someone else in the described manner for the reasons listed in the questionnaire.

This experiment will take approximately thirty minutes. Your name will not be connected in any way with your answers and all questionnaires will be entirely anonymous. Although there is no reason why this experiment should result in any injury, it is my duty to inform you that it is not the policy of the University of Connecticut to compensate subjects in the event that a research procedure results in physical or psychological injury. The University of Connecticut will, however, make its most advantageous recommendation upon request if injury does occur.

Questions regarding this research project may be directed to Jeffrey D. Fisher, PhD., Principal Investigator, Room 165 Psychology, (203) 486-5917.

I have read the material above, and agree to participate in the study.

\_\_\_\_\_  
Signature of Participant

---

注：この調査は、Fisher 教授に依頼して実施された。

生，132名を対象者にして調査を実施した。

b) 調査の実施時期

調査は，1993年11月中の授業時に，3度に分けて，対象者の集団に質問紙を手渡し，その場で回答を求める仕方を実施した。なお，質問紙を配布する前に，調査への同意を求めた（表14）。

c) 質問紙の構成と実施手続き

高木（1991b）を参考にして，向社会的行動の8つのクラスターを代表すると思われる典型的な行動を13種類選定し，それぞれについて行動が生起する援助場面（表15）と生起しない非援助場面（表16）とを設定した。一方，高木（1993）を参考にして，向社会的行動の代表的な促進要因（援助動機；表17の要因欄を参照）と抑制要因（非援助動機；表18の要因欄を参照）をそれぞれ25種類選定した。そして，それらの行動と規定要因（動機）とを組み合わせ，各促進（また

表15 行動が生起する13種類の援助場面

- 
1. 勉学に関連した援助行動
    1. Y helped X with his (her) study or homework.
  2. 貸与的援助行動
    2. Y lent X something or money.
  3. 労働奉仕的援助行動
    - 3-1. 嫌いで厄介な雑事でのちょっとした手助け行動
      3. Y helped X with his (her) housework.
    - 3-2. 自動車に関連した労働奉仕的行動
      4. Y helped X with car trouble.
    - 3-3. 労力を必要とする援助行動
      5. Y helped X move.
  4. 精神的，心理的援助行動
    - 4-1. 話や相談の相手になる思いやり行動
    - 4-2. 忠告や励ましの援助行動
      6. X had a problem. Y gave advice or cheered him (her) up.
  5. 遺失に関連する援助行動
    - 5-1. 何かを捜している人に対する援助行動
      7. Y gave direction to X, who lost his (her) way.
    - 5-2. 拾得物に関連した援助行動
      8. Y found something lost by X and returned it to X.
  6. 小さな親切行動
    9. Y gave X change for a dollar.
  7. 寄付・提供，奉仕行動
    - 7-1. 寄付・提供行動
      10. X asked Y to donate money or time to a charity. Y did donate.
    - 7-2. 奉仕活動
      11. Y took care of or visited X, who was old or handicapped.
  8. 病人や負傷者に対する援助行動
    12. Y helped X, who had an accident or injured in an emergency.
    13. Y donated blood or organs for X.
-

は、抑制) 要因(動機)が各行動の生起(または、非生起)の原因にどの程度なると思うかを「非常になり得る」(5点)から「全くなり得ない」(1点)までの5段階で評定することを求めた。

なお、評定総数が $(13 \times 25) + (13 \times 25) = 650$ と非常に多数となるため、実施の可能性、負担の軽減、評定の信頼性などを考慮し、評定場面を行動生起場面と非生起場面とに分け、13行動も3群に分けることにした。すなわち、132名の対象者を無作為に3群に分けるが、分けられた3群の等質性を検定するために、1つの行動をどの群にも評定することを求め、残りの12行動を無作為に4行動ずつの3群に分け、合計5行動を25個の促進要因、あるいは抑制要因で評定することを求めたのである。その結果、一人の対象者に求めた評定数は $5 \times 25 = 125$ 個となった。評定に要した時間は、15分から30分であった。ところで、評定漏れや2重評定等があり、分析に用いた対象者は、表17の通りである。

表16 行動が生起しない13種類の非援助場面

- 
1. 勉学に関連した援助行動
    1. Y did not help X with his (her) study or homework.
  2. 貸与的援助行動
    2. Y did not lend X anything or money.
  3. 労働奉仕的援助行動
    - 3-1. 嫌いで厄介な雑事でのちょっとした手助け行動
      3. Y did not help X with his (her) housework.
    - 3-2. 自動車に関連した労働奉仕的行動
      4. Y did not help X with car trouble.
    - 3-3. 労力を必要とする援助行動
      5. Y did not help X move.
  4. 精神的、心理的援助行動
    - 4-1. 話や相談の相手になる思いやり行動
    - 4-2. 忠告や励ましの援助行動
      6. X had a problem. Y did not give advice or cheer him (her) up.
  5. 遺失に関連する援助行動
    - 5-1. 何かを捜している人に対する援助行動
      7. Y did not give direction to X, who lost his (her) way.
    - 5-2. 拾得物に関連した援助行動
      8. Y found something lost by X and did not return it to X.
  6. 小さな親切行動
    9. Y did not give X change for a dollar.
  7. 寄付・提供、奉仕行動
    - 7-1. 寄付・提供行動
      10. X asked Y to donate money or time to a charity. Y did not donate.
    - 7-2. 奉仕活動
      11. Y did not take care of or visit X, who was old or handicapped.
  8. 病人や負傷者に対する援助行動
    12. Y did not help X, who had an accident or injured in an emergency.
    13. Y did not donate blood or organs for X.
-



表17 調査票と被調査者数（不完全なものを除く）

		調査票番号	評定する行動の番号
Subjects (128)	Helping questionnaire (58)	1 (28)	1, 2, 3, 4, 5
		2 (13)	1, 6, 7, 8, 9
		3 (17)	1, 10, 11, 12, 13
	Not-helping questionnaire (70)	1 (27)	1, 2, 3, 4, 5
		2 (22)	1, 6, 7, 8, 9
		3 (21)	1, 10, 11, 12, 13

表18 促進要因（援助動機）の構造（回転後因子負荷行列）

番号	促進要因（援助動機）	基本要因（因子）				
		F-1	F-2	F-3	F-4	F-5
2.	Y expects something in return.	0.707	-0.132	0.075	-0.022	-0.022
11.	Y owes X a favor.	0.701	-0.125	0.230	-0.166	-0.119
13.	Y has nothing else to do (Y has enough time).	0.526	0.284	-0.052	-0.070	-0.233
18.	Y wants to compensate for X.	0.517	0.262	-0.161	0.019	0.015
7.	Y feels obligated or pressured to help.	0.444	0.071	-0.083	0.075	0.151
20.	Y has no experience in helping.	0.347	0.034	-0.001	0.088	0.029
12.	Y may someday need help as well.	0.325	0.245	0.177	0.193	-0.032
22.	Y has had bad experiences when Y was not helped in the past.	0.257	0.158	0.070	-0.003	0.038
19.	Y has had good experiences while helping in the past.	0.178	0.652	0.111	0.047	0.043
6.	Y wants to help others.	-0.069	0.589	0.027	0.216	0.092
3.	Y is a nice or kind person.	-0.063	0.564	0.088	0.128	0.066
21.	Y has had good experiences being helped in the past.	0.156	0.547	0.202	0.092	-0.004
8.	Y has the skill, ability and knowledge to help X.	0.188	0.405	-0.053	-0.041	0.157
4.	Y has compassion or sympathy for X.	-0.019	0.370	0.339	0.176	0.341
16.	It requires little effort for Y.	0.271	0.361	-0.129	-0.093	0.015
17.	X asked Y to help.	0.119	0.224	-0.044	-0.192	-0.202
5.	Y cares about X.	-0.014	0.120	0.725	0.008	0.172
10.	Y likes or loves X.	0.064	0.038	0.703	-0.228	0.098
1.	Y is a friend or relative of X, or Y knows X well.	0.016	0.037	0.693	0.113	-0.024
23.	Y wants to feel good about him(her)self.	0.159	0.121	0.057	0.829	-0.146
24.	Y thinks that helping is the right thing to do.	-0.138	0.354	-0.050	0.562	0.056
25.	Y expects to experience feelings of guilty if Y does not help.	0.351	-0.033	-0.220	0.469	0.321
9.	Y knows that X needs help, because it is important, or an emergency.	0.016	0.272	0.190	-0.059	0.569
15.	No one else can help X.	0.173	0.202	0.099	0.024	0.371
14.	Y is in a good mood.	0.369	0.340	0.056	0.085	-0.479

d) 評定群の等質性の検定と構造究明の分析法

3群による各要因の評定に関して、群を変数とする1要因の分散分析を2（場面）×25（規定要因）=50回行った。その結果、5%水準以上で有意な主効果はいずれの場合も認められず、3群の評定群が等質であると判断された。

評定群の等質性が保証されたので、彼らの評定を統合して、規定要因の構造究明のデータとすることにした。行動生起（援助）場面と非生起（非援助）場面別に、13行動を通じて、規定要因の間相関を算出し、25×25の相関行列に主因法による因子分析を適用し、心理的に有意な構造を得るためにバリマックス回転を行った。なお、因子数は、固有値の大きさとその推移、および説明率等を手がかりにして決定した。

表19 抑制要因（非援助動機）の構造（回転後因子負荷行列）

番号	抑制要因（非援助動機）	基本要因（因子）			
		F-1	F-2	F-3	F-4
4.	Y has no compassion or sympathy for X.	0.836	0.116	0.122	-0.039
5.	Y does not care about X.	0.815	0.051	0.116	0.013
6.	Y does not want to help others.	0.690	0.074	0.171	0.070
3.	Y is mean / stingy / greedy / selfish.	0.680	0.094	0.186	-0.137
7.	Y does not feel obligated or pressured to help.	0.350	-0.017	0.147	0.094
20.	Y has no experience in helping.	0.013	0.713	-0.032	0.293
21.	Y has had bad experiences being helped in the past.	0.068	0.686	0.092	0.017
19.	Y has had bad experiences while helping in the past.	0.166	0.611	0.185	0.051
25.	Y is afraid that he/she would get something wrong.	-0.149	0.550	-0.044	0.259
22.	Y has had bad experiences when Y was not helped in the past.	0.072	0.454	0.074	0.102
24.	Y does not think that helping is the right thing to do.	0.072	0.385	0.232	-0.022
12.	Y feels that X will not help if Y needs it.	0.197	0.037	0.669	0.151
11.	X did not help when Y needed it.	0.193	0.066	0.638	0.215
10.	Y dislikes or hates X.	0.472	0.094	0.504	0.004
2.	Y can not expect anything in return.	0.155	0.194	0.372	0.055
18.	Y does not think that X should be compensated.	0.213	0.315	0.368	-0.050
13.	Y has something else to do (Y has no time).	-0.003	0.040	0.081	0.673
23.	Y is tired, ill or injured.	-0.025	0.249	0.054	0.466
16.	Y does not want to be bothered.	0.203	-0.092	0.182	0.460
15.	Y knows that someone else will help X.	0.079	0.053	-0.063	0.429
8.	Y does not have the skill, ability and knowledge to help X.	-0.024	0.249	-0.067	0.380
14.	Y is in a bad mood.	0.199	0.186	0.294	0.345
1.	Y is not a friend or relative of X, or Y does not know X well.	0.197	0.013	0.198	0.233
9.	Y does not know that X needs help, because it is not important, or an emergency.	-0.072	0.117	0.109	0.224
17.	X did not ask Y to help.	-0.084	0.022	0.089	0.206

## (2) 結 果

スクリープロットおよび Kaiser 基準に基づき、向社会的行動の促進要因（援助動機）は5因子構造であることが最適と判断され、その指定の基で因子分析され、回転された結果（因子負荷列）が表18に示されている。同様に、抑制要因（非援助動機）は、4因子構造が最適と判断され、その指定の基に因子分析され、回転された結果（因子負荷行列）が表19に示されている。各因子に高く負荷する規定要因を手掛かりにして、因子の解釈と命名を以下に行う。

## (3) 考 察

### a) 向社会的行動の促進的基本要因（援助動機）の構造

第1因子（固有値, 2.551; 因子寄与率, 26.3%）に高く負荷する要因としては、「返礼の期待・予想」（要因番号; #2, 以後同じ）「恩恵の負債」(#11)「時間の余裕」(#13)「賠償の意図」(#18)「援助への圧力, 義務感」(#7)「援助経験の欠如」(#20)「将来の被援助の予想」(#12)がある。これらの要因は、直接的に、あるいは間接的に互惠性（過去の、あるいは将来の恩恵、または損害を相互に弁済し合うこと）を指示する規範（Reciprocity Norm）に関係するものである。そこでこの基本要因を『互惠性規範の存在』と命名した。

第2因子（2.532; 26.1%）に高く負荷する要因としては、「ポジティブな援助経験」(#19)「援助への積極的態度・意図」(#6)「援助的な性格特性」(#3)「ポジティブな被援助経験」(#21)「援助を可能にする技術, 能力, 知識」(#8)「被援助者への同情, 共感」(#4)がある。これらの要因は、ポジティブな援助経験を基盤にして形成した援助に対する積極的な態度, 能力, および性格特性を表しており、したがってこの基本要因を『援助的人格特徴』と命名した。

第3因子（1.931; 19.9%）に高く負荷する要因としては、「被援助者に関心があり, 気になる人」(#5)「被援助者が好きな, あるいは愛している人」(#10)「被援助者が知人, 友人, あるいは親戚の人」(#1)がある。これらの要因は、援助者と被援助者の間の心理的に近い関係を表しており、したがってこの基本要因を『援助者と被援助者の近い人間関係』と命名した。

第4因子（1.534; 15.8%）に高く負荷する要因としては、「援助によるポジティブな感情体験の期待」(#23)「援助を善とする信念」(#24)「非援助によるネガティブな感情体験の回避」(#25)がある。これらの要因は、善と信じる援助を通じてポジティブな感情の体験を求めることに関係しており、したがってこの基本要因を『援助を通じたポジティブな感情体験の希求』と命名した。

第5因子（1.151; 11.9%）に高く負荷する要因としては、「援助の必要性の認識」(#9)「潜在的援助者の不在」(#15)「援助者の不快な気分」(#14)がある。これらの要因は、被援助者にとっては言うまでもないが、不快な気分を援助によって快に変化させるためには援助者にとっても、援助が必要であるということを表しており、したがってこの基本要因を『被援助者, あるいは援助者にとっての援助の必要性』と命名した。

b) 向社会的行動の抑制的基本要因（非援助動機）の構造

第1因子（固有値，2.996；因子寄与率，33.6%）に高く負荷する要因としては、「被援助者への同情，共感の欠如」(#4)「被援助者に関心がなく，気にならない人」(#5)「援助への消極的態度・意図」(#6)「非援助的な性格特性」(#3)「援助への圧力，義務感の欠如」(#7)がある。これらの要因は，他者に関心がなく，困っている人に同情し，助けねばならないという義務感も感じず，援助に消極的で，援助に結びつき難い性格特徴を持っているといったことを表している。したがってこの基本要因を『非援助的人格特徴』と命名した。

第2因子（2.377；26.6%）に高く負荷する要因としては、「援助経験の欠如」(#20)「ネガティブな被援助経験」(#21)「ネガティブな援助経験」(#19)「援助失敗の不安」(#25)「ネガティブな被援助拒否経験」(#22)「援助を悪とする信念」(#24)がある。これらの要因は，援助に関連するネガティブな過去経験に由来する援助を否定する信念を表しており，したがってこの基本要因を『ネガティブな援助経験に基づく反援助（援助拒否）信念』と命名した。

第3因子（1.797；20.1%）に高く負荷する要因としては、「被援助者による将来の援助拒否の予想」(#12)「被援助者が過去の援助拒否者」(#11)「被援助者が嫌いな，あるいは憎んでいる人」(#10)「返礼の期待・予想の欠如」(#2)「賠償の意図の欠如」(#18)がある。これらの要因は，直接的に，あるいは間接的に互惠性（過去の，あるいは将来の恩恵，または損害を相互に弁済し合うこと）を指示する規範（Reciprocity Norm）の欠如とその結果に関係するものである。そこでこの基本要因を『互惠性規範の欠如』と命名した。

第4因子（1.750；19.6%）に高く負荷する要因としては、「時間の切迫」(#13)「援助者の身体的悪条件」(#23)「面倒・当惑の回避欲求」(#16)「潜在的援助者の存在」(#15)「援助を可能にする技術，能力，知識の欠如」(#8)「援助者の不快な気分」(#14)とがある。これらの要因は，援助者が援助しようとするのを妨害，あるいは抑制する条件を表しており，したがってこの基本要因を『援助の妨害や抑制の存在』と命名した。

c) 促進的基本要因（援助動機）と抑制的基本要因（非援助動機）の構造比較

両基本要因（動機）の構造を比較すると，促進と抑制の逆の関係で行動を規定する共通の基本要因（因子）が2つ存在することが分かる。1つは，互惠性規範であり，もう一つは，援助に関係する人格特徴である。

過去に他者から恩恵を受けたなら，今その人，あるいは別の人を援助することによってそれに返礼すべきである。将来他者から恩恵を受けることが予想されるときには，今自ら進んで他者に恩恵を施しておくべきである。あるいは，過去に他者に損害を与えたなら，今その人，あるいは他者への援助でそれに償いをすべきである。さらには，過去において援助が拒否されたなら，今その人，あるいは別の人の援助を拒否してもよい。これらは，恩恵や損害に関する互惠性や相互性のきまりを表現しており，人間関係におけるそのことの大切さを社会的な規範として指摘している。この「互惠性（相互性）の規範」を支持する人の場合は援助が促進され，それに反対する

人の場合は援助が抑制されることが示唆された。

他者に関心を示し、他者のことを気に掛け、他者の苦しみに同情し、共感する。そして必要な時は自ら進んで援助すべきだと考え、その責任を進んで引き受けようとする積極的な態度を持つ。また、性格的にも、善良で、親切で、思いやりがある。これらの特徴は、援助に関連した過去経験から獲得されたものであるが、このような人格特徴の持ち主は、援助に積極的であり、逆の特徴を持つ人は、援助に消極的であることが示唆された。

以上の2基本要因の他は、促進か抑制かのいずれかに関わる基本要因である。

まず、促進の第3基本要因のように、援助者と被援助者の間の心理的に近い関係は向社会的行動を促進するが、疎遠な関係が行動を抑制するとは必ずしもいえない。

他者の援助行動によって困っている人は、例えば、自己の問題が解決する。このように、援助者は、他者の問題の解決を目的に恩恵行動を行うが、この援助行動を通じて人は種々の感情を経験する。行動が目的を果たし、被援助者がこれに感謝しているのを見ると、援助者はポジティブな感情を経験する。また、そのような行動を行った自分自身に満足し、誇りさえ感じることもある。このような体験は、被援助者の問題の解決を目的にする以上に、援助を通じて経験するポジティブな感情自身を目的に援助者に行動を行わせるようになる。ある意味では、自己満足的、利己的援助ということになる。これが、促進の第4基本要因である。

援助は時に失敗に終わることがある。当初の目的を果たさず、かえって事態を悪化させてしまうかもしれない。援助者としては、例えば、自分の無能さや状況判断の不適当さに落胆し、ネガティブな感情を経験する。また、人は、被援助者としてもこのような事態を体験することがある。例えば、援助されて自尊心が傷つくとか、援助によって自分が援助者に利用されているなどと感じて、ネガティブな感情を経験する。援助を通じて体験するポジティブな感情は、そのことを目的とした利己的な援助動機を援助者に抱かせる時もあるが、促進の第2基本要因のように、援助に対する積極的な態度や共感能力、さらには善良で親切的な性格の形成の原動力となる。しかしながら、以上のようなネガティブな感情体験は、援助を必ずしも善とせず、援助に反対する考えを人に抱かせ、その人を援助に対して消極的にさせるのである。抑制の第2基本要因は、このことを表している。

互恵性（相互性）の考えが支持されていなくても、援助に積極的な人格特徴の持ち主でなくても、援助者と被援助者の関係が心理的に遠くても、あるいは、援助を通じてポジティブな感情体験が期待できなくても、人は援助することがある。それは、被援助者にとって援助が重要で、緊急であると判断され、援助の必要性が強く認識されたときである。促進の第5基本要因は、このことを表している。

ところで、援助に対して必ずしも消極的な態度や抑制的な性格を持っていなくても、援助が差し控えられる時がある。それは、例えば、援助するために特別の技術、能力、体力、あるいは知識が必要であるのに、それを欠いている場合、または、それらは別としてかなりの時間が必要で

あるのに、邪魔されずにやらねばならないことがある場合、さらには、いつもならそうではないのだが、今は疲労、病氣、あるいは負傷していてそれが出来ない場合などである。抑制の第4基本要因は、このことを表している。

d) 行動生起を規定する基本要因（動機）の構造の日米比較

まず、向社会的行動の生起を促進する基本要因（援助動機）の構造を日本（高木，1983）と米国で比較する。

日米のいずれの研究においても、男女大学生を対象にして、各国のサンプルから収集され整理された25種類の代表的な促進要因について、その構造を同じ分析方法（因子分析）によって解明することを試みた。その結果、日本においては6種類の促進的基本要因（援助動機）を、米国においては5種類の促進的基本要因（援助動機）を析出することが出来た。

互恵性や相互性が人間関係における主要な社会的ルールとなっている米国において、第1基本要因（「互恵性規範の存在」）が行動を促進するものとして明確に析出されていることはよく理解出来るが、日本においても第5基本要因（「非援助出費と援助報酬の予想」）としてそれに類した基本要因が認められる。米国の第2基本要因（「援助的人格特徴」）は、援助や被援助に関連したポジティブな経験が愛他的、援助的性格や能力、あるいは援助に対する好意的態度を養成することによって、援助を促進させることを意味しているが、日本においては、これが第3基本要因（「援助または被援助の好ましい経験」）と第4基本要因（「援助者もしくは被援助者の好ましい人格特徴および援助者の良き感情状態」）の援助者の好ましい人格特徴の部分に対応している。米国の第3基本要因（「援助者と被援助者の近い人間関係」）は、明らかに、日本における第6基本要因（「援助者と被援助者の近い関係」）に対応しており、いずれの国においても、両者の間の近い関係が援助を促進することを示唆している。米国の第4基本要因（「援助を通じたポジティブな感情体験の希求」）は、日本においてそれと対応するものを持たない。被援助者の苦難からの救済は、援助の目的の一つになっているだろうが、むしろ援助を通じた快感情を追求し、非援助からくる不快感情を回避しようとする自分本位の考え方は、利己的援助として愛他的援助から区別される。この基本要因の抽出は、米国人の本音を反映していると思われる。これに比して、日本では第1基本要因（「行動促進的状況判断」）が抽出されている。これは、援助を必要とする人がいれば、自分にとってそれが可能なら、自ら進んでその人を助けるべきであり、そうする責任が自分にあると信じる、というように、援助を善とし、それへの社会的責任を受容すべきとする紋切り型の考えを建前的に承認することを反映していると思われる。最後に、米国の第5基本要因（「被援助者、あるいは援助者にとっての援助の必要性」）の被援助者に関する部分は、日本の第2基本要因（「責任の分散不可能性」）に対応している。しかし、米国の要因の援助者に関連する部分は、日本にはそれに対応するものがなく、米国の第4基本要因と利己的援助に関連するという点が類似している。すなわち、不快な気分は嫌なものであり、何らかの方法でこれを少しでもよい気分にするように人は動機づけられる。ときに人は、他者への援助をそのために利用するというも

のである。

以上のように、日米の基本要因（援助動機）には、直接対応するもの、分離または統合されて現れるもの、そして、各文化に特有のものとして固有に現れるものが存在している。

では次に、向社会的行動の生起を抑制する基本要因（非援助動機）の構造を日本（高木，1987b）と米国で比較する。

米国における第1基本要因（「非援助的人格特徴」）は、他者に関心がなく、彼らを思いやり共感同情することが出来ず、また、他者を助けることに対して消極的な態度を持つため、援助の義務感もないといった非援助的な人格の持ち主があまり援助しないことを表しているが、これは、日本における第3基本要因（「援助者もしくは被援助者の好ましくない人格特徴」）の援助者に関する部分に対応している。米国の第2基本要因（「ネガティブな援助経験に基づく反援助信念」）は、援助、非援助および被援助に関連して不快な経験をしたために援助に対して拒否的構えが出来てしまったことを表しており、日本の第2基本要因（「援助または被援助の好ましくない経験」）と第1基本要因の行動抑制的状況判断の部分にほぼ対応している。米国の第3基本要因（「互恵性規範の欠如」）は、過去および未来における互恵性や相互性の維持が存在しなかったり存在しそうでないときに援助が抑制されることを意味しているが、これは、日本の第1基本要因（「行動抑制的状況判断および非援助出費や援助報酬の非予想」）の出費と報酬の部分に対応している。米国の第4基本要因（「援助の妨害や抑制の存在」）は、援助を妨害したり身体的、心理的、および状況的条件が存在するというものであるが、これは、日本の第4基本要因（「責任の分散可能性」）と第5基本要因（「援助能力の欠如」）に対応している。

抑制的基本要因（非援助動機）の構造を日米間で比較してきたが、促進的基本要因の場合に較べて、対応は一層複雑となっていることが明らかである。

## 2) 規定要因による向社会的行動の類型の特徴づけ

向社会的行動を促進する、あるいは抑制する要因の間の関連構造を明らかにし、上述のように促進要因については5つの基本要因から、抑制要因については4つの基本要因からその構造が成り立っていることを明らかにした。そこでつぎに、この研究で用いられた13種類の行動を選定する基となっている高木（1991）が明らかにした向社会的行動の8つの類型（クラスター）を、それらの基本要因（援助動機と非援助動機）によって特徴づける。

### (1) 方法

#### a) 手続き

促進的基本要因と抑制的基本要因の構造究明のためのデータをこの研究のために用いる。まず、促進的基本要因と抑制的基本要因の構造に基づき、基本要因（因子）に関する簡便因子得点を算出する。基本要因を表す各因子に高く負荷する要因を表20のように選び、各要因についての評定素点を合計し、その平均点をもって簡便因子得点とした。

表20 基本要因の簡便因子得点を算出するために選ばれた要因（番号）

促進的基本要因	
1. #2, #7, #11, #12, #13, #18, #20	4. #23, #24, #25
2. #3, #4, #6, #8, #19, #21	5. #9, #14(逆転), #15
3. #1, #5, #10	
抑制的基本要因	
1. #3, #4, #5, #6, #7	3. #2, #10, #11, #12, #18
2. #19, #20, #21, #22, #24, #25	4. #8, #13, #14, #15, #16, #23

表21 8つの行動類型に対応する行動の番号（生起場面も非生起場面も同じ）

類 型	行 動	類 型	行 動
1.	#1	5.	#7, #8
2.	#2	6.	#9
3.	#3, #4, #5	7.	#10, #11
4.	#6	8.	#12, #13

一方、13種類の典型的な向社会的行動は、表21のように、8つの行動類型にまとめる。

#### b) 分 析 法

向社会的行動の類型を特徴づけるために、促進的基本要因と抑制的基本要因の簡便因子得点の平均値と標準偏差値を算出し、各得点に関して、類型間の差の検定を行う。なお、前述のように、無作為に調査対象者を3群に分け、彼らに5つの行動の生起、あるいは非生起について評定を求めているため、対応のある差の検定と、その無い検定とを区別して行う必要がある。そのために、前者については Univariate 法で、後者については t 検定法で差の検定を行った。なお、Univariate 法では、対象者の数を等しくするために、第3類型では3行動の得点の平均を、第5、第7、第8類型では2行動の得点の平均を算出し、その値を類型の得点とした。t 検定の場合は対象者の数を合わす必要が無いため、Univariate 法と同様に平均を算出することなく、3倍、あるいは2倍の対象者がいると考えて計算を行った。

#### (2) 結 果

5つの促進的基本要因の各々による8つの向社会的行動類型間の比較検定結果は、表22から表26に、4つの抑制的基本要因の各々によるそれらは、表27から表30に示されている。紙数の関係で、13の典型的な行動間のそれらについては、ここでは省略する。

#### (3) 考 察

##### a) 促進的基本要因から見た行動類型の特徴

促進的基本要因の平均簡便因子得点から行動類型を特徴づけてみる。先述のように、この得点は1点から5点の幅を持ち、その値が3点を境にして、それより大きくなるほど、この要因が向



表22 促進的基本要因（援助動機：互恵性規範の存在）の因子得点の平均（SD）と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果（t 値と有意水準）							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	3.00(.383)			-2.913 **	3.157 **	2.731 **	2.270 *			3.714 ***
2. 貸与的援助行動	3.11(.463)				3.478 **	3.268 **	2.672 *	2.091 *		4.096 ***
3. 労働奉仕的援助行動	3.24(.508) (.594)	***			3.828 ***	4.738 ***	4.122 ***	3.460 ***		5.914 ***
4. 精神的、心理的援助行動	2.58(.418)	**								
5. 遺失に関連する援助行動	2.58(.670) (.687)	**								
6. 小さな親切行動	2.47(.796)	*								
7. 寄付・提供、奉仕行動	2.80(.596) (.679)	+								2.785 *
8. 病人や負傷者に対する援助行動	2.50(.639) (.662)	***								

\*\*\*: p<.001 \*\* : p<.01 \* : p<.05 + : p<.10

注1：因子得点の平均と括弧内は標準偏差（2段の場合、上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の、下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値）を示す。

注2：各サンプルの因子得点が中点（3点）から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果（有意水準）を示す。

表23 促進的基本要因（援助動機：援助的人格特徴）の因子得点の平均（SD）と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果（t 値と有意水準）							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	3.61(.470)	***		-2.497 *	-3.603 ***	-1.656 +			-2.870 **	
2. 貸与的援助行動	3.51(.677)	***		-2.472 *	-3.174 **	-1.959 +			-3.065 **	-1.771 +
3. 労働奉仕的援助行動	3.81(.388) (.461)	***			-2.538 *				-1.748 +	
4. 精神的、心理的援助行動	4.15(.410)	***				1.874 +	2.346 *			1.632 +
5. 遺失に関連する援助行動	3.87(.665) (.681)	***					2.126 +			
6. 小さな親切行動	3.59(.846)	*								
7. 寄付・提供、奉仕行動	3.98(.486) (.545)	***								1.875 +
8. 病人や負傷者に対する援助行動	3.82(.621) (.695)	***								

\*\*\*: p<.001 \*\* : p<.01 \* : p<.05 + : p<.10

注1：因子得点の平均と括弧内は標準偏差（2段の場合、上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の、下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値）を示す。

注2：各サンプルの因子得点が中点（3点）から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果（有意水準）を示す。

表24 促進の基本要因 (援助動機: 援助者と被援助者の間の近い人間関係) の因子得点の平均 (SD) と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果 (t 値と有意水準)							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	4.02(.647)	***			-4.948 ***					
2. 貸与的援助行動	4.20(.624)	***			-3.887 ***					
3. 労働奉仕的援助行動	4.17(.500) (.635)	***			-5.288 ***					
4. 精神的、心理的援助行動	4.80(.348)	***				3.017 *	2.938 *	4.189 ***	3.898 ***	
5. 遺失に関連する援助行動	3.82(1.026) (1.287)	**								
6. 小さな親切行動	3.67(1.255)	+								
7. 寄付・提供、奉仕行動	4.02(.552) (.921)	***								
8. 病人や負傷者に対する援助行動	4.13(.605) (.825)	***								

\*\*\*: p<.001 \*\*: p<.01 \*: p<.05 +: p<.10

注1: 因子得点の平均と括弧内は標準偏差 (2段の場合, 上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の, 下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値) を示す。

注2: 各サンプルの因子得点が中点(3点)から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果(有意水準)を示す。

表25 促進の基本要因 (援助動機: 援助を通じたポジティブな感情体験の希求) の因子得点の平均 (SD) と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果 (t 値と有意水準)							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	3.60(.823)	***							-1.959 +	
2. 貸与的援助行動	3.39(.685)	**		-2.663 *	-2.241 *				-3.256 **	-2.704 **
3. 労働奉仕的援助行動	3.68(.450) (.573)	***			2.394 *				-2.397 *	
4. 精神的、心理的援助行動	3.26(.709)					-2.506 *			-3.082 **	-2.711 **
5. 遺失に関連する援助行動	3.87(.733) (.880)	***					1.951 +			
6. 小さな親切行動	3.54(.938)	+							-1.722 +	
7. 寄付・提供、奉仕行動	3.98(.620) (.724)	***								
8. 病人や負傷者に対する援助行動	3.86(.630) (.677)	***								

\*\*\*: p<.001 \*\*: p<.01 \*: p<.05 +: p<.10

注1: 因子得点の平均と括弧内は標準偏差 (2段の場合, 上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の, 下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値) を示す。

注2: 各サンプルの因子得点が中点(3点)から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果(有意水準)を示す。

表26 促進の基本要因（援助動機：被援助者あるいは援助者自身にとっての援助の必要性）の因子得点の平均（SD）と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果（t 値と有意水準）							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	3.11(.622)									-5.114 ***
2. 貸与的援助行動	3.20(.524)	+								-4.810 ***
3. 労働奉仕的援助行動	3.15(.582) (.754)	+								-5.339 ***
4. 精神的、心理的援助行動	3.15(.443)									-3.965 ***
5. 遺失に関連する援助行動	3.10(.629) (.810)									-4.423 ***
6. 小さな親切行動	3.10(.599)									-3.996 ***
7. 寄付・提供、奉仕行動	3.24(.571) (.679)	+								-3.676 **
8. 病人や負傷者に対する援助行動	3.94(.577) (.659)	***								

\*\*\*: p<.001 \*\*: p<.01 \*: p<.05 +: p<.10

注1：因子得点の平均と括弧内は標準偏差（2段の場合、上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の、下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値）を示す。

注2：各サンプルの因子得点が中点（3点）から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果（有意水準）を示す。

社会的行動の生起の原因になり易いことを、それより小さくなるほど生起原因になり難いことを意味する。そこで、各サンプルの因子得点が中点の3点から統計的に有意に相違するかどうかを検定することによって、その要因が原因になり易い、あるいは、なり難いと主張できるかどうかを確かめた。表22から表26の有意水準（P）の欄に示されているアスタリスクは、その検定結果の有意水準を表している。以下に、この観点からの行動類型の特徴を簡単に記す。

① 勉学に関連した援助行動

「援助的人格特徴」（F 2）「援助者と被援助者の間の近い人間関係」（F 3）「援助を通じたポジティブな感情体験の希求」（F 4）がこの型の行動の生起原因になり易いと思われている。すなわち、援助に積極的な態度を持ち、他者を思いやる愛他的な性格特性や能力の持ち主が、心理的に近い関係の人に対して、行動を通じてポジティブな感情の体験を期待して、勉学に関連した援助行動を行うようである。

② 貸与的援助行動

勉学に関連した援助行動の場合と同じ3つの要因が、この型の行動の生起原因になり易いと思われているが、「被援助者あるいは援助者自身にとっての援助の必要性」（F 5）も原因になる可能性がいくらかあると思われているようである。すなわち、3つの要因のいずれかに加えて、あるいは単独に、援助の必要性の認識が行動の原因になる傾向がある。

③ 労働奉仕的援助行動

貸与的援助行動の場合と同じ4つの要因が行動生起に関係すると思われるが、この型の行動の場合、特に「互恵性規範の存在」(F 1)も行動の生起原因になり易いと思われるようである。すなわち、援助するために身体的努力と時間などを要するこの行動の場合、行動を通じた人間関係の互恵性、相互性に関する考へ方の同意が要件となっているようである。

④ 精神的、心理的援助行動

この型の行動の場合、特に「援助的人格特徴」(F 2)と「援助者と被援助者の間の近い人間関係」(F 3)が行動の生起原因になり易いと強く信じられているようである。これとは逆に、「互恵性規範の存在」(F 1)は生起原因になり難いと思われるようである。すなわち、相談の相手となり、忠告や励ましをその人に与えるといった内容の援助行動の場合は、援助コストも小さく、それへの返済を期待することもない。それよりむしろ、心理的に近い関係にある人に対して、思いやりをもった愛他的な人物がこの行動を行い易いようである。

⑤ 遺失に関連する援助行動

勉強に関連した援助行動や貸与的援助行動や労働奉仕的援助行動の場合と同様に、「援助的人格特徴」(F 2)「援助者と被援助者の間の近い人間関係」(F 3)「援助を通じたポジティブな感情体験の希求」(F 4)がこの型の行動の生起原因になり易いと思われる。しかし、精神的、心理的援助行動の場合と同様に、「互恵性規範の存在」(F 1)はこの型の行動においても、その生起原因になり難いと思われるようである。すなわち、失ったものを捜すのを手助けするか、拾得物を持ち主などに届けるといったこの型の行動は、予想に反して、以前落としたものが返ってきてありがたかったので、自分の場合も送り返すといったことでは起こらないようである。

⑥ 小さな親切行動

この型の行動の場合、「援助的人格特徴」(F 2)のみが生起原因になり易いと思われる。なお、「援助者と被援助者の間の近い人間関係」(F 3)と「援助を通じたポジティブな感情体験の希求」(F 4)については、小さいながらも原因になる可能性が示唆されている。一方、精神的、心理的援助行動や遺失に関連する援助行動の場合と同様に、「互恵性規範の存在」(F 1)はこの型の行動においても、その生起原因になり難いと思われるようである。すなわち、両替をする、傘を差しかけてあげる、ドアを開けてあげるといったこの型の行動は、たいしたコストを相手に負わせるものではないので、それへの互恵性や相互性を期待することはない。それよりは、親切心のようにその人がどの程度援助的な人格特徴をもっているかに行動生起がかかっているようである。

⑦ 寄付・提供、奉仕行動

「援助的人格特徴」(F 2)「援助者と被援助者の間の近い人間関係」(F 3)「援助を通じたポジティブな感情体験の希求」(F 4)は、この型の行動の生起原因になり易いと思われるが、

表27 抑制的基本要因（非援助動機：非援助的人格特徴）の因子得点（SD）と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果（t 値と有意水準）							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	3.23(.923)			-2.378 *						
2. 貸与的援助行動	3.40(.830)	*								
3. 労働奉仕的援助行動	3.55(.862) (.970)	***								
4. 精神的、心理的援助行動	3.19(.804)									
5. 遺失に関連する援助行動	3.42(.680) (.873)	**								
6. 小さな親切行動	3.39(.850)	*								
7. 寄付・提供、奉仕行動	3.47(.837) (.885)	***								
8. 病人や負傷者に対する援助行動	3.28(.920) (.974)	+								

\*\*\*: p<.001 \*\* : p<.01 \* : p<.05 + : p<.10

注1：因子得点の平均と括弧内は標準偏差（2段の場合、上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の、下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値）を示す。

注2：各サンプルの因子得点が中点（3点）から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果（有意水準）を示す。

表28 抑制的基本要因（非援助動機：ネガティブな援助経験に基づく反援助信念）の因子得点（SD）と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果（t 値と有意水準）							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	2.48(.783)	**	-2.476 *	-1.804 +						
2. 貸与的援助行動	2.74(.689)	+					2.803 **			
3. 労働奉仕的援助行動	2.70(.811) (.981)	**					2.857 **			
4. 精神的、心理的援助行動	2.69(.812)	+					2.732 *			
5. 遺失に関連する援助行動	2.50(.647) (.777)	***					3.101 **			
6. 小さな親切行動	2.21(.636)	***							-1.728 +	-2.406 *
7. 寄付・提供、奉仕行動	2.56(.606) (.833)	***								
8. 病人や負傷者に対する援助行動	2.68(.741) (.809)	*								

\*\*\*: p<.001 \*\* : p<.01 \* : p<.05 + : p<.10

注1：因子得点の平均と括弧内は標準偏差（2段の場合、上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の、下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値）を示す。

注2：各サンプルの因子得点が中点（3点）から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果（有意水準）を示す。

表29 抑制的基本要因（非援助動機：互恵性規範の欠如）の因子得点（SD）と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果（t 値と有意水準）							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	3.22(.587)	+	-3.353 **						1.683 +	2.072 *
2. 貸与的援助行動	3.68(.621)	***		2.098 *	3.174 **	3.999 ***	3.193 **	4.232 ***	4.512 ***	
3. 労働奉仕的援助行動	3.39(.658) (.748)	***			1.667 +	2.896 **	1.796 +	3.286 **	3.791 ***	
4. 精神的、心理的援助行動	3.10(.658)									
5. 遺失に関連する援助行動	2.96(.593) (.909)									
6. 小さな親切行動	3.07(.713)									
7. 寄付・提供、奉仕行動	2.91(.702) (.799)									
8. 病人や負傷者に対する援助行動	2.83(.812) (.846)									

\*\*\*: p<.001 \*\* : p<.01 \* : p<.05 + : p<.10

注1：因子得点の平均と括弧内は標準偏差（2段の場合、上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の、下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値）を示す。

注2：各サンプルの因子得点が中点（3点）から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果（有意水準）を示す。

表30 抑制的基本要因（非援助動機：援助の妨害や抑制の存在）の因子得点（SD）と類型間の差の検定結果

行 動 類 型	因子得点の 平均(SD)注1	p 注2	行動類型間の差の検定結果（t 値と有意水準）							
			2	3	4	5	6	7	8	
1. 勉学に関連した援助行動	3.37(.550)	**	2.693 *	-2.462 *		2.839 **	3.032 **		1.851 +	
2. 貸与的援助行動	2.92(.750)			-5.021 ***						
3. 労働奉仕的援助行動	3.65(.537) (.644)	***			2.723 **	5.859 ***	5.201 ***	4.230 ***	4.588 ***	
4. 精神的、心理的援助行動	3.24(.627)	+					1.933 +			
5. 遺失に関連する援助行動	2.95(.443) (.635)									
6. 小さな親切行動	2.84(.674)									
7. 寄付・提供、奉仕行動	3.13(.602) (.663)									
8. 病人や負傷者に対する援助行動	3.09(.605) (.661)									

\*\*\*: p<.001 \*\* : p<.01 \* : p<.05 + : p<.10

注1：因子得点の平均と括弧内は標準偏差（2段の場合、上段は3あるいは2行動に関する一人の対象者の因子得点を平均してその人のクラスター因子得点とした時の、下段は行動数に応じて3倍あるいは2倍の対象者がいると仮定した時の値）を示す。

注2：各サンプルの因子得点が中点（3点）から統計的に有意に変異するかどうかの検定結果（有意水準）を示す。

「被援助者あるいは援助者自身にとっての援助の必要性」(F5)も原因になる可能性がいくらかあると思われる。これとは逆に、「互惠性規範の存在」(F1)は、生起原因になり難いと思われるようである。慈善活動にお金や時間を寄付する、あるいは、お年寄りや障害者の世話をしたり彼らの施設を訪問するといったこの型の行動は、互惠性や相互性の考えから行われるのではなく、援助者の人格特徴や援助者と被援助者の近い関係や状況の援助必要性に行動生起がかかっているようである。

#### ⑧ 病人や負傷者に対する援助行動

「互惠性規範の存在」(F1)は、この型の行動の生起原因になり難いと思われるが、他の4つの要因の全てが原因になり易いと思われる。特に、「被援助者あるいは援助者自身にとっての援助の必要性」(F5)が比較的大きな平均値を示している。これは、この型の行動が緊急で、重要なものであるという特徴によるものであろう。

以上、行動類型毎にその特徴を促進的基本要因から見てきたが、その視点を逆転し、次に、8つの行動類型全般にわたって各促進的基本要因がどのように関わっているかを見てみる。

#### ① 互惠性規範の存在(表22参照)

この基本要因は、他の基本要因に較べて、行動生起の原因になり難いと思われる。しかしながら、「労働奉仕の援助行動」(C3)の場合には、明らかにこの要因が行動の生起に強く関わっていると思われる。また、「勉学に関連した援助行動」(C1)や「貸与的援助行動」(C2)の場合においても、これ以外の類型に較べて、いくらかは生起に関わる方向にある。見返りが期待できるとか以前の関係から返礼や賠償の義務感があるといったことは、本来の愛他的な行動においては誘因とはなり難いものではあるが、行動のためかなりのコストが必要な場合には、決して強力ではないが、この要因が生起理由になるのだろう。

#### ② 援助的人格特徴(表23参照)

この基本要因は、どの行動類型においても、その生起原因に比較的近いと思われる。その中でも、「精神的、心理的援助行動」(C4)の場合に、他の類型に較べて、その要因が行動の生起に強く関わっていると思われる。善良で親切な性格であり、援助のための技術、能力、知識のみならず、他者に同情共感する能力があるとか、援助や被援助に関連して過去に心地よい経験をしていて、そのこともあって援助に積極的な態度を持っているといったことは、どのような種類の行動であっても、その生起理由になるのであろう。とりわけ、相手の相談に乗り、忠告や励ましをその人に与えるといった行動では、以上のような援助的人格特徴が重要な意味を持つのであろう。

#### ③ 援助者と被援助者の間の近き人間関係(表24参照)

この基本要因は、他の基本要因に較べて、しかもどの行動類型においても、最も強くその生起に関わっていると思われる。その中でも、「精神的、心理的援助行動」(C4)の場合に、他の類型に較べて、この要因が行動の生起に最も強く関わっており、「遺失に関連する援助行動」

(C 5) や「小さな親切行動」(C 6) の場合には、逆に関わりの程度が比較的弱いようである。相手が友人、知人、あるいは親戚の人であり、その人を好きとか愛している、さらに、そのような理由で相手のことが気になるといったように援助者と被援助者の間の関係が親密であることは、どのような種類の行動であれ、どのような要因にもまして、重要な生起理由になるのだろう。特に、相手の相談に乗り、忠告や励ましをその人に与えるといった行動では、その前提として、両者の近い関係が必要なのであろう。

#### ④ 援助を通じたポジティブな感情体験の希求（表25参照）

この基本要因は、どの行動類型においても、行動生起の原因に比較的なり易いと思われている。その中でも、「寄付・提供、奉仕行動」(C 7) の場合に、他の類型に較べて、この基本要因が行動の生起に最も強く関わっているようである。どのようなタイプの援助行動であれ、それは行うべき正しい事柄であり、したがって、行えばよい気分になり、行わないと罪の意識で苦しむことになることを人々はよく知っている。そこで、人々は、相手のこともさることながら、活動を通じて経験する快感情を求めて自分のためにも援助行動に従事する。慈善活動に協力して、お金や活動のための時間を寄付したり、お年寄りや障害者の世話をしたり、彼らの施設を慰問するといった行動は、特にそのようなことを目指して行われるようである。

#### ⑤ 被援助者あるいは援助者自身にとっての援助の必要性（表26参照）

この基本要因は、どの行動類型においても、行動生起の原因になるともならないともはっきりいえない中立的な要因と思われている。しかしながら、「病人や負傷者に対する援助行動」(C 8) の場合には、他の類型に較べて、この基本要因が行動の生起に最も強く関わっていると考えられている。急病人や事故による負傷者の依存の程度は、他の被援助者のそれに較べて、大きく、また重大である。したがって、この要因が、一層重要な生起理由になるのだろう。

##### b) 抑制的基本要因から見た行動類型の特徴

では次に、抑制的基本要因の平均簡便因子得点から行動類型を特徴づけてみる。この場合も、各サンプルの因子得点が midpoint の 3 点から統計的に有意に変異するかどうかを検定することによって、その基本要因が原因になり易い、あるいは、なり難いと主張できるかどうかを確かめた。表 27 から表 30 の有意水準 (P) の欄に示されているアスタリスティックは、その検定結果の有意水準を表している。

以下に、この観点からの行動類型の特徴を簡単に記す。

#### ① 勉学に関連した援助行動

「援助の妨害や抑制の存在」(F 4) がこの型の行動の非生起原因になり易く、「互恵性規範の欠如」(F 3) は非生起原因になる可能性がいくらかあると思われている。逆に、「ネガティブな援助経験に基づく反援助信念」(F 2) は、この型の行動の非生起原因になり難いと思われている。すなわち、勉強や宿題をする仲間を助けるというこの型の行動は、援助や被援助に関連して不快な経験をしたために援助に反対の信念を持っているからではなく、煩わされることなくしな



ければならないことが他にあり、援助する時間の余裕がないとか、気分が悪い、病気や疲労で体調が十分でないとか、援助するための技術、能力、知識が自分にはないといったことが原因で抑制されるようである。また、時には、かつて自分の援助要請を拒否した嫌いで憎い人だからとか、援助しても相手の返礼が期待できないなどの理由から、抑制されることもあるようだ。

#### ② 貸与的援助行動

「互惠性規範の欠如」(F 3)と「非援助的人格特徴」(F 1)がこの型の行動の非生起原因になり易いと、逆に、「ネガティブな援助経験に基づく反援助信念」(F 2)は、この型の行動の非生起原因にならない可能性があると思われる。すなわち、お金や物を貸すというこの型の行動は、相手がかつて自分の援助要請を拒否した嫌いで憎い人だからとか、貸しても相手の返礼が期待できないなどの理由で、あるいは、自分が人格的に貧しく、自分のことしか考えず、相手のことが気にならず、相手に同情共感できないし、援助の義務感も持っていないという理由で抑制されるようである。しかし、援助や被援助に関連して不快な経験をしたために援助に反対の信念を持っているという理由で抑制されることはあまりないようである。

#### ③ 労働奉仕的援助行動

「援助の妨害や抑制の存在」(F 4)「非援助的人格特徴」(F 1)「互惠性規範の欠如」(F 3)がこの型の行動の非生起原因になり易いと、逆に、「ネガティブな援助経験に基づく反援助信念」(F 2)はこの型の行動の非生起原因になり難いと思われる。すなわち、援助するために身体的努力と時間などを要するこの行動は、援助や被援助に関連して不快な経験をしたために援助に反対の信念を持っているという理由で抑制されるのではない。煩わされることなくしなければならぬことが他にあり、援助する時間の余裕がないとか、気分が悪い、病気や疲労で体調が十分でないとか、援助するための技術、能力、知識が自分にはないという理由で、また、自分が人格的に貧しく、自分のことしか考えず、相手のことが気にならず、相手に同情共感できないし、援助の義務感も持っていないという理由で、さらに、相手がかつて自分の援助要請を拒否した嫌いで憎い人だからとか、援助しても相手の返礼が期待できないなどの理由で抑制されるようである。

#### ④ 精神的、心理的援助行動

「援助の妨害や抑制の存在」(F 4)がこの型の行動の非生起原因になる可能性がある、逆に、「ネガティブな援助経験に基づく反援助信念」(F 2)はこの型の行動の非生起原因にならない可能性があると思われる。すなわち、相手の相談に乗り、忠告や励ましをその人に与えるといったこの型の行動は、この研究で取り上げた抑制的基本要因によって明確に規定されないが、煩わされることなくしなければならぬことが他にあり、援助する時間の余裕がないとか、気分が悪い、病気や疲労で体調が十分でないとか、援助するための技術、能力、知識が自分にはないという理由で抑制されることがいくらかあり、逆に、援助や被援助に関連して不快な経験をしたために援助に反対の信念を持っているという理由で抑制されることがあまりないようである。

る。

⑤ 遺失に関連する援助行動

⑥ 小さな親切行動

⑦ 寄付・提供，奉仕行動

これらの型の行動の場合、「非援助的人格特徴」（F 1）が行動の非生起原因になり易いと、逆に、「ネガティブな援助経験に基づく反援助信念」（F 2）が非生起原因になり難いと思われている。すなわち、失ったものを捜すのを手助けするとか、拾得物を持ち主などに届けるといった型の行動、また、両替をする、傘を差しかけてあげる、ドアを開けてあげるといった型の行動、さらには、慈善活動にお金や時間を寄付する、あるいは、お年寄りや障害者の世話をしたり彼らの施設を訪問するといった行動は、自分が人格的に貧しく、自分のことしか考えず、相手のことが気にならず、相手に同情共感できないし、援助の義務感も持っていないという理由で抑制され、逆に、援助や被援助に関連して不快な経験をしたために援助に反対の信念を持っているという理由では抑制されないようである。

⑧ 病人や負傷者に対する援助行動

この型の行動の場合、「非援助的人格特徴」（F 1）が行動の非生起原因になる可能性がいくらかあると、逆に、「ネガティブな援助経験に基づく反援助信念」（F 2）が非生起原因になり難いと思われている。すなわち、事故で怪我をした人や急病人を助けたり、彼らのために献血したり臓器を提供するといった緊急で重大な事態での行動は、援助や被援助に関連して不快な経験をしたために援助に反対の信念を持っているという理由で抑制されることはないが、自分が人格的に貧しく、自分のことしか考えず、相手のことが気にならず、相手に同情共感できないし、援助の義務感も持っていないという理由で抑制されることがいくらかあるようだ。

以上、行動類型毎にその特徴を抑制的基本要因から見てきたが、その視点を逆転し、次に、8つの行動類型全般にわたって各抑制的型本要因がどのように関わっているかを見してみる。

① 非援助的人格特徴（表27参照）

この基本要因は、4つの基本要因の中で、最も行動の非生起原因になり易いと思われるようである。その場合でも、「労働奉仕的援助行動」（C 3）と「寄付・提供，奉仕行動」（C 7）において、他の類型に較べて、この要因が行動の非生起に強く関わっていると思われており、逆に、「精神的，心理的援助行動」（C 4）や「勉学に関連した援助行動」（C 1）の場合においては、この要因が行動の非生起に関わる程度が弱いと思われているようである。すなわち、自分が人格的に貧しく、自分のことしか考えず、相手のことが気にならず、相手に同情共感も持っていないということは、潜在的援助者の持っている基本的な人格特徴であり、どのような種類の行動においても少なからず行動生起への重要な障害となるだろう。お金や物の貸与、身体的労力やそれを発揮するための時間の提供が求められる比較的成本の大きい前二者の行動類型では、そのことを大した問題としないほどの援助に積極的な人格特徴が必要であり、その意味で、それとは逆の

人格特徴が大きな障害となるのだろう。ところが、これらの行動に比して、相手の相談に乗り、忠告や励ましをその人に与えるといった行動や勉強や宿題をする仲間を助けるといった行動は比較的成本が小さく、全く無関係ではないが、この基本要因のような理由は大きな障害とはならないのである。

② ネガティブな援助経験に基づく反援助信念（表28参照）

この基本要因は、どの行動類型においても、その非生起原因になり難いと思われている。その場合でも、「小さな親切行動」（C6）において、他の類型に較べて、この基本要因が行動の非生起に最も関わらないと思われているようである。すなわち、援助や被援助に関連して過去に不快な経験をしたために、他者を援助することについて否定的な信念を持ち、それが色々な人助け行動を抑制する一因になることは確かにあるだろうが、一方では援助は好ましい行動であり、社会がその実行を期待していることも人々がよく知っていることを考え合わせると、これのみが主要な抑制因となることは少ないと思われる。ましてや、特別の、大したコストを要しない「小さな親切行動」（C6）においては、この基本要因のような理由が有意味な障害とはならないのである。

③ 互惠性規範の欠如（表29参照）

この基本要因は、比較的少数の類型においてのみ、その非生起原因になると思われている。その中でも、「貸与的援助行動」（C2）の場合に、他の類型に較べて、この要因が行動の非生起に最も強く関わっており、これに次いで「労働奉仕的援助行動」（C3）の場合にも強く関わっていると思われているようである。逆に、「病人や負傷者に対する援助行動」（C8）の場合に、非生起に関わる程度が最も弱く、むしろ関わらない方向にある。すなわち、お金や物の貸与、身体的労力やそれを発揮するための時間の提供が求められる比較的成本の大きい前二者の行動類型では、それに対する返礼や見返りの期待や自分が困ったときに援助してもらえとの予想が重要であり、それが無いときにはそのことが障害となる。ところが、すぐさまの介入を要する急病人や事故の負傷者への援助の場合、彼らにそのようなことを期待することがあまり無いため、この基本要因のような理由は障害とはなり難いのである。

④ 援助の妨害や抑制の存在（表30参照）

この基本要因も、比較的少数の類型においてのみ、その非生起原因になると思われている。その中でも、「労働奉仕的援助行動」（C3）の場合に、最も強く非生起に関わっており、これに次いで「勉強に関連した援助行動」（C1）の場合にも強く関わっていると思われているようである。逆に、「小さな親切行動」（C6）の場合に、非生起に関わる程度が最も弱く、むしろ関わらない方向にある。すなわち、前二者のように身体的労力やそれを発揮するための時間、さらには、特別の知識や能力が必要な行動の場合は、煩わされることなくしなければならないことが他にあり、援助する時間の余裕がないとか、気分が悪い、病気や疲労で体調が十分でないとか、援助するための技術、能力、知識が自分にはないという理由が明らかに大きな障害となる。しか

し、そのようなものを必要とせず、小さな親切心だけで十分な「小さな親切行動」(C6)の場合、この基本要因のような理由はほとんど障害とはならないのである。

c) 行動類型と促進的および抑制的基本要因の関連性の日米比較

向社会的行動（類型）とその生起を促進する基本要因との、および抑制する基本要因との関連構造を日本（高木，1983；1987b）と米国で比較する。

米国における「勉学に関連した援助行動」は、日本においてそれと明確に対応する類型を持たない。したがって、日米の比較は不可能である。

米国における「貸与的援助行動」は、日本における「分与行動」にほぼ対応すると思われる。この型の行動の生起を促進する基本要因として、日米で共通するものに、援助を促進する人格特徴の持ち主であることと援助者と被援助者が近い関係にあることがある。一方、共通しない要因として、米国では、援助を利用してポジティブな感情を経験したいという願いの存在と援助の必要性認識があり、日本では、被援助者の好ましい人格特徴と潜在的援助者の良き感情状態がある。さて、この型の行動の生起を抑制する基本要因として、日米で共通するものに、援助を通じて互恵的、相互的關係が期待できないことがある。一方、共通しない要因として、米国では、潜在的援助者が非援助的な人格特徴の持ち主であることがあり、日本では、潜在的援助者に援助能力が欠如していること、援助責任が回避できること、および、援助が必要でない状況と判断することとがある。以上のように、日米に特有な要因もいくつか存在するが、潜在的援助者が愛他的な人物であり、被援助者と近い関係にあるときに、この型の援助が起り易く、援助を通じて互恵的な両者の関係が発展できそうにないときに、行動の抑制が起り易いことは、日米で共通するようである。

米国における「労働奉仕的援助行動」は、日本における「努力を必要とする援助行動」にほぼ対応すると思われる。この型の行動の生起を促進する基本要因として、日本で唯一有意に関わる要因である潜在的援助者と被援助者が近い関係にあることが米国においても有意な基本要因となっている。したがって、共通しない要因としては、米国の、潜在的援助者が援助的人格特徴の持ち主であること、援助することによってポジティブな感情を経験したいという希望を持っていること、援助が必要だと状況と判断すること、および援助を通じて互恵的關係が期待できることがある。さて、この型の行動の生起を抑制する基本要因として、米国で有意な要因である能力の欠如や他の潜在的援助者の存在のように援助を妨害あるいは抑制する条件が存在すること、潜在的援助者が非援助的な人格特徴の持ち主であること、援助を通じて互恵的關係が期待できないことが日本においても有意な抑制的基本要因となっている。したがって、共通しない要因としては、日本の、援助が必要でないとの状況判断、被援助者が好ましくない人格特徴の持ち主であることがある。以上のように、日米に特有な要因もいくつか存在するが、潜在的援助者が被援助者と近い関係にあるときに、この型の援助が起り易く、潜在的援助者自身とその状況に援助を行い難くさせるものが存在していたり、進んで援助しようとしないう人物であったり、援助を通じて互恵

的な関係が期待できないときに、行動の抑制が起こり易いことは、日米で共通するようである。

米国における「精神的、心理的援助行動」は、日本においてそれと明確に対応する類型を持たない。したがって、日米の比較は不可能である。

米国における「遺失に関連する援助行動」は、日本における「迷子や遺失者に対する援助行動」にはほぼ対応すると思われる。この型の行動の生起を促進する基本要因として、日米で共通するものに、潜在的援助者が援助を促進する人格特徴の持ち主であることがある。一方、共通しない要因として、米国では、潜在的援助者と被援助者が近い関係にあることと援助を利用してポジティブな感情を経験したいという願いが存在することがあり、日本では、非援助出費が予想されたり援助報酬が期待できること、被援助者が好ましい人格特徴の持ち主であること、潜在的援助者が良き感情状態にあることがある。さて、この型の行動の生起を抑制する基本要因として、日米で共通する要因は認められず、米国では、潜在的援助者が非援助的な人格特徴の持ち主であることが、日本では、援助が必要でないと状況を判断することと援助を通じて互恵的、相互的關係が期待できないこととが有意な抑制の基本要因となっている。以上のように、潜在的援助者が愛他的な人物であるときに、この型の行動は、日米いずれにおいても起こり易いが、抑制に関しては共通する基本要因が存在しないようである。

「小さな親切行動」は、日米において共通して認められる。この型の行動の生起を促進する基本要因として、日米で共通するものに、潜在的援助者が援助を促進する人格特徴の持ち主であることがある。一方、共通しない要因としては、その規定力は弱いが、米国では、潜在的援助者が被援助者と近い関係にあることと援助を利用してポジティブな感情を経験したいという願いを持っていることとがあり、日本では、被援助者が好ましい人格特徴の持ち主であること、潜在的援助者が良き感情状態にあることがある。さて、この型の行動の生起を抑制する基本要因として、日米で共通する要因は認められず、米国では、潜在的援助者が非援助的な人格特徴の持ち主であることが、日本では、潜在的援助者が援助責任を回避することができることがある。以上のように、遺失に関連する援助行動と同様に、この型の行動は、潜在的援助者が愛他的な人物であるときに、日米いずれにおいても起こり易いが、抑制に関しては共通する基本要因が存在しないようである。

米国における「寄付・提供、奉仕行動」は、日本における「寄付・奉仕行動」にはほぼ対応すると思われる。この型の行動の生起を促進する基本要因として、日米で共通するものは、潜在的援助者に援助や被援助に関して好ましい過去経験があり、援助を促進する人格特徴があることである。一方、共通しない要因としては、米国では、潜在的援助者が被援助者と近い関係にあることと援助を利用してポジティブな感情を経験したいという願いを持っていることとがあり、日本では、援助が必要だと状況を判断すること、被援助者が好ましい人格特徴の持ち主であること、および潜在的援助者が良き感情状態にあることとがある。さて、この型の行動の生起を抑制する基本要因として、日米で共通する要因は認められず、米国では、潜在的援助者が非援助的な人格特

徴の持ち主であることが、日本では、潜在的援助者に援助や被援助に関して好ましくない過去経験があること、援助が必要でないと状況を判断すること、および潜在的援助者に援助能力が欠如していることがある。以上のように、この型の行動は、潜在的援助者が以前に援助や被援助において好ましい経験をしており、愛他的な人物であるときに、日米いずれにおいても起こり易いが、抑制に関しては共通する基本要因が存在しないようである。

米国における「病人や負傷者に対する援助行動」は、日本における「緊急事態における救助行動」にはほぼ対応すると思われる。この型の行動の生起を促進する基本要因として、日本において有意な要因となっているところの他に潜在的援助者が存在しないために被援助者にとって援助が必要であるとの状況判断が、米国においても有意な基本要因になっている。したがって、共通しない要因としては、米国の、潜在的援助者が援助を促進する人格特徴の持ち主であること、援助者と被援助者が近い関係にあること、および援助を利用してポジティブな感情を経験したいという願いを潜在的援助者が持っていることがある。さて、この型の行動の生起を抑制する基本要因としては、日本では有意に規定するものが発見できなかった。したがって日米で共通する要因は存在しない。なお、米国では、潜在的援助者が非援助的な人格特徴の持ち主であることが、その規定力は弱い、抑制要因になるようである。以上のように、この型の行動は、援助が必要であるとその状況を判断したときに、日米いずれにおいても起こり易いが、抑制に関しては共通する基本要因が存在しないようである。

#### 4. 最後に：向社会的行動の分類学的研究の意義と今後の研究

社会的行動に関する社会心理学的研究について、次のような反省が為されている (Pearce, P. et al., 1983)。すなわち、①たとえ同じ社会的行動を研究するにしても、研究者が焦点を当てる行動の側面が異なることが多く、したがって、それらの研究から得られた知見から、それらを共通して説明する一般的な理論を導き出し、それを将来の研究に役立てることが困難である。②研究者がそれぞれ個人的に依拠する理論枠組みに基づいて行った研究の知見は、枠組みの違いによってしばしば矛盾し合い、相互に対立することがある。③研究がどのような環境（被験者や手続きなど）のもとで行われたかが明細に示されていないことが多く、したがって、研究知見に基づいて理論を一般化しようとしても、どこまで可能かが明かでない、などといった問題への反省である。

高木（1982, 1991a）は、これらの問題を同様に認識し、それを克服する1つの研究方法として、理論的研究に先立って行うべき「分類学的接近法による行動研究」を提案した。すなわち、他の諸科学（例えば、動物学や植物学など）が研究に先立って、研究で取り扱う対象それ自身の分類学的研究を行うのと同じように、研究対象となる社会的行動の分類学的研究を行い、行動やそれが生起する行動状況をその特徴から分類整理しようとするものである。そして、この分類学的研究の知見を利用すれば、向社会的行動の研究において、次のような効用が期待できるのであ

る。すなわち、①向社会的行動の特徴が分かるので、それを参考にすれば、当該行動を促進する、あるいは抑制すると推定される要因を研究のために的確に選択することが可能となる、②研究で取り扱う要因に関して明らかに異なる向社会的行動を選択することが出来るため、研究において、厳密に、また、組織的に当該要因を操作することが可能となる、③研究において取り扱われた向社会的行動の特徴が分かるので、それを参考にすれば、当該研究の結果の考察が、つまり、仮説が検証されたかどうかの判断および知見から理論を導出することが容易になる、④研究において取り扱われた向社会的行動の特徴が分かるため、当該研究の知見をどこまで一般化出来るか、つまり、理論がどの程度包括的かを判断することが可能となる、⑤研究において取り扱われている向社会的行動の特徴が分かるため、その差異を考慮に入れて、既に行われている研究の間の比較が可能となる、⑥研究知見にもし矛盾があれば、研究で取り扱われた向社会的行動の特徴から、その原因を推定することが可能となる、といった効用である。

高木修は、このことを目的にして、日本においていくつかの研究(1982, 1983, 1987a, 1987b, 1987c)を、また比較文化的な観点から、米国においてもこの研究の他にいくつかの研究(1991b, 1992, 1993)を行っている。そして、日本と米国における、向社会的行動の種類の構造、向社会的行動に対する規範的態度の構造、向社会的行動を促進する、あるいは抑制する要因の構造、行動類型と行動を規定する基本的要因との関連構造、さらにそれらの日米間の差異、などを明らかにしている。

今後は、これらの分類学的研究の効用を活用して、個々具体的な動態的研究を組織的に計画し、その実施を通じて、上記の問題を乗り越えた知見(知識)の蓄積によって、向社会的行動の理解の進展とその応用が図られることが期待される。

#### 参 考 文 献

- 原田純治(1989)被援助者の反応に関する研究 日本心理学会第53回大会発表論文集 218.  
原田純治(1990)援助行動と動機・性格との関連 実験社会心理学研究 第30巻 第2号 109-121.  
Pearce P., Amato, P. R. & Smithson, M. (1983) Introduction and plan of the book. In Smithson, M., Amato, P. R. & Pearce, P. *Dimensions of helping behaviour*. Oxford: Pergamon Press.  
高木 修(1982)順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学 第23号 135-156.  
高木 修(1983)順社会的行動の動機の構造 年報社会心理学 第24号 187-207.  
高木 修(1987a)順社会的行動の分類 関西大学『社会学部紀要』 第18巻 第2号 67-114.  
高木 修(1987b)非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ 関西大学『社会学部紀要』 第19巻 第1号 27-49.  
高木 修(1987c)援助行動の類型と特性 中村陽吉・高木修(共編)『「他者を助ける行動」の心理学』 光生館 14-33.  
高木 修(1991a)援助行動:その分類学的研究(第2章 第2節) 三隅・木下(共編)『現代社会心理学の発展Ⅱ』 ナカニシヤ出版 123-151.  
高木 修(1991b)米国における向社会的行動の分類学的研究 (1)向社会的行動の類型 関西大学『社会学部紀要』 第23巻 第1号 141-165.

米国における向社会的行動の分類学的研究（高木）

高木 修（1992）米国における向社会的行動の分類学的研究（2）向社会的行動についての規範的態度 関西大学『社会学部紀要』 第23巻 第2号 75-106.

高木 修（1993）米国における向社会的行動の分類学的研究（3）向社会的行動の生起を促進，あるいは抑制する動機，原因，理由 関西大学『社会学部紀要』 第24巻 第2号 155-239.

高木 修・竹村和久（1984）援助動機と非援助動機の関係 関西大学『社会学部紀要』 第16巻 第1号 51-65.